
まほろば 第二部

雨霧颯太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まほろば 第一部

【Zコード】

N7084F

【作者名】

雨霧颯太

【あらすじ】

人類の前に新たなる脅威が現れた。その名も七大天使。その圧倒的な力の前にアメリカ艦隊は消滅した。60年の時を超えてよみがえったまほろば。まほろばは人類を救うことが出来るのか。新たな戦いが今、始まる。

プロローグ 消滅アメリカ第七艦隊

太平洋上空、高度500mでアメリカ海軍のF-18Eスーパー・ホーネットが爆散した。

この化け物

スーパー・ホーネット隊長のジョ・シュア大尉が憎々しげにオロチを見た。

上空をフライパスするスーパー・ホーネットの編隊の真下には、オロチの姿があつた。戦闘開始から15分が経過し、30本以上のミサイルをアメリカ海軍が誇る最新鋭機の編隊はお見舞いしたが、オスカルの周波バリアの前にことごとく無力化され、オロチの放つ光弾の前に次々と撃墜されていった。

のJ-16はジョシュア含めて2機になつた時、オロチはいきなりその姿を海中に没した。

「いつたい・・・・どうしたんだ・・・・」

ジョシュアは理解出来なかつた。勝つていた戦いだつたのに、どうして逃げたのか。だがジョシュアには考える時間はなかつた。燃料が限界に近づいていたのだつた。ジョシュアはすぐに機を母艦のある艦隊に向けようとしたそのとき、無線から見知らぬ男の声が聞こえた。

ジョシュアの機だけではなかつた。アメリカ本国でも、日本でもイギリスでも、ロシアでもフランスでも、インターネット、TV、無線、ラジオありとあらゆる媒体から声と映像が現れた。

「我が名はミカエル。人類を滅亡に導くもの。人類よ・・・我が天の槍を刮目せよ。」

ミカエルが空を指差すと、太平洋の映像が現れた。眼下にはアメリカ第7艦隊の輪形陣が広がつていた。雲を破つて人型の機械が現れた。

白く神々しく輝くその機体は背後に大きな六対の翼を持ち、右手には大きな槍を携え、まさに天使と形容するに相応しい姿をしていた。第七艦隊の面々は突如現れたこの巨人をただ見上げることしか出来なかつた。

「ウリエルよ。無知なる人類にその力を見せよ・・・」

ウリエルと呼ばれたそれは、右手に持つた槍を下に向けてただ回した。わずか1秒にも満たない、流れのような美しい動きだつた。

だが、その動きがもたらしたものは恐ろしい結果だつた。その天の槍の一撃は海を割り、第7艦隊を一瞬で消滅させた。その爆煙は遙か遠くを飛行するジョシュアからも見えた。

「何だ・・・俺は、夢を見ているのか・・・」

ジョシュアの目指している先に最早艦隊は存在しなかつた。あるのは破片と、重油にまみれた海面が広がつてゐるだけだつた。

「世界よ・・・我々は対話も交渉も望まない。ただ望むのは世界の滅亡。それだけだ・・・」

ミカエルと名乗った男の背後で6体の大型兵器が見えた。その姿はウリエルと同じように白く光輝いていた。

「人類よ。我らが七大天使の前に滅ぶが良い。」

その姿を最後に。通信が切れた。

この日、全世界が人智を超えた力と絶望を目にした。

太平洋上空、アメリカ艦隊上空を小さな戦闘機が飛んでいた。零式桜花一型強行偵察タイプ「影花」であった。

「千尋さん。まもなく現場の海域です。」

機体を制御する人工知能の桜花が千尋に話しかけた。

「こいつはひどいな・・・桜花さん。アメリカ艦隊は全滅だ。どの艦も原形をどどめていない・・・」

影花に搭載された超望遠光学カメラで撮影しながら千尋は桜花に言った。

「これほどの力を持つものが私達以外にいるなんて・・・」

モニターに映し出された桜花は口を押さえていた。桜花自身、M機関以外オーバーテクノロジーの存在はショックであるようだった。

「もしかしたら、生存者がいるかもしれない。桜花さん、もう少し
だけ探してみよう。」

桜花はモニター越しに頷くと、高度を下げて行った。

天使ウリエル

頭頂高：170m

全幅：300m（翼含む）

主機関：不明

武装：神槍ブリューニク

七大天使の一機。主機関、その他ほとんどが謎のベールで包まれている。

固定武装は神槍「ブリューニク」。近接戦闘の他、先端からビーム

を発射する遠距離用の武器としても活用出来る。

ブリュードークの一撃で、第七艦隊を壊滅させてしまった。

第1話 人類の力

暗く、明かりのついていない部屋。遙か宇宙、衛星軌道上にあるヴァルハラと呼ばれる場所の一室に彼はいた。彼は仲間の天の槍を見て笑みを浮かべた。

それはどこか、狂氣を感じさせる笑みだつたが、彼の神々しく美しい顔はその狂氣すら美へと昇華させるものだった。

「火の七日間の始まりだよ。ラファエル。」

映像から照らされた明かりに映えた彼の姿は少年そのものだった。年は16、7歳に思われたが、彼の存在はそのような概念すらも超越した美しさを放っていた。彼は荘厳な音楽すらその価値を失うほどの声で、傍らの者に話しかけた。

「はい。ミカエル様。」

傍らにいたラファエルが主の言葉に頷いた。

長く伸びた髪を後ろで結んだ。背の高い男だつた。白と銀に彩られた服に身をまとつたラファエルは目線を傍らのミカエルに向けた。

「あと7日で人類は滅亡する。我々が歴史を終わらせる。全てを無に還すんだ。ラファエル。」

ラファエルを見ることなくミカエルは楽しげに言った。無邪氣とも狂氣でも形容出来ない、何もかもが超越している。ラファエルはそう感じていた。

「我々七大天使が人類に鉄槌を、裁きの火をもたらしましよう。」

ラファエルはそう言つと、恭しく頷いた。遙か天上でミカエルの笑い声がこだましていた。

同じ頃、アメリカ艦隊が消滅した海域をまほろばの艦載機である零式桜花11型強硬偵察タイプ「影花」が飛行していた。

「生存者はなしと考えた方がいいな。」

M機関の調査部員として入隊した広瀬千尋は影花が持つ、超望遠特殊光学カメラで海域を撮影し続けていた。彼のファインダー越しに映つたのは重油と粉々になつた米軍艦艇の破片ばかりだった。

「そうですね。生体反応は見受けられません。それに、周囲は原子力空母が爆発したせいで高レベルの放射能が検出されています。仮に今助かっていたとしても・・・」

コクピットにあるモニターに十一単を着た美しい女性が映し出された。名を「桜花」まほろばの艦載機、零式桜花を始め、M機関の航空機の統合制御コンピュータだった。現在、影花が飛行している海域は高レベルの放射能で汚染されていた。防護服を着る間もなく海上に投げ出され、原子力空母の原子炉の爆発に巻き込まれたアメリカ艦隊のクルーは万に一つ生きていたとしても、その運命は決まつていた。

影花の放射線センサーが表示した通常ではあり得ない高レベルの放射線量をみたとき、千尋は唇を噛んだ。

「くそ・・・桜花さん。大気のサンプルも撮影も終わつたし、まほろばに帰投しよう。それから、放射能除去物質の散布を。」

「はい。」

桜花は頷くと目を閉じた。影花は大きく旋回し、桜色の粉末を散布した。

60年に及ぶ長い研究の過程の中で、M機関は放射能を無力化する物質を開発することに成功していた。千尋の目の前にあるディスプレイに表示された残留放射能の数値が見る見るうちに下がつていった。放射能のレベルがゼロになったことを確認した影花は一気に加速すると大空に消えていった。

オロチの東京襲撃から一年を経過した現在、自衛隊、特殊戦術研究旅団は戦力の再編に忙殺されていた。

現代技術の粋を集めた兵器群ですら、オロチを倒すことは出来なかつた。旅団長の山根はオロチを倒す新兵器の開発を筑波の研究所に要請するとともに、作戦研究と部隊の再編に奔走した。

天使ミカエルの人類絶滅予告の翌日、彼は筑波にある特殊兵装研究所、略して特兵研にいた。特兵研では特殊戦術研究旅団の最新兵器のほとんどすべてが開発されていた。

「よく来たね。山根君。」

特兵研所長の小森博士が山根を迎えた。小森は山根を自分の部屋まで案内した。

「どうですか？新型ミサイルは？」

部屋につくなり、山根は单刀直入に小森博士に尋ねた。

「ははは・・・君も気が早いね。この一年で完成させたにしては上出来だよ。オロチの実戦データが何より役に立つた。」

小森は「コーヒーメーカーに手を取ると、2つのカップにコーヒーを注いで言った。

「オロチのバリアシステムは大したものだ。だが、あれをなんとかすれば、私達に勝ち目は十分にある。」

小森は両手に持つたカップの一つを山根に手渡した。

「そうですか・・・しかし、博士は天使に勝てると思いますか?」

小森からもつたカップを転がしながら、山根は小森に尋ねた。

「ははは・・・やはり君が来たのはミサイルではなく、アレのことだつたんだね。」

小森は笑うと、白髪まじりの頭をくしゃくしゃとかきながら山根に言った。

「アレはオロチに関して言うならば、互角以上の戦いが出来るだろう。そう設計したからね。だが、それ以上の存在となると、分からぬのが正直な気持ちだ。だが、君はそれではいけない。勝てるかどうかじゃない。勝たせるのが指揮官である君の役目だ。」

小森は真剣なまなざしで山根に言った。山根は少し陰のある笑顔で

頷いた。小森は小さくため息をついた。

「どうやら、天使に当たられてしまったようだね。君がそれでは皆困ってしまうぞ。ついて来たまえ。君にいいものを見せてあげよう。」

小森は山根を研究所の地下深くにある格納庫に案内した。扉が開くと、山根の前に「例のアレ」の巨体が出迎えた。

「すでに本体は完成し、最終調整中だ。山根君。」

格納庫に眠る「例のアレ」の巨体を見たとき、山根の瞳に生気が戻つて来た。

「あらがとうござります。博士。」

「もう一度と天使なんかにあてられるなよ。」

そのとおり、地下格納庫に警報音が響き渡った。

「伊勢湾沖にオロチ出現。くりかえす。伊勢湾沖にオロチ出現。」

オペレーターがオロチ出現の情報を館内に知らせた。

「私は直ちに市ヶ谷司令部で指揮を執ります。博士は」」一つの最終調整を急がせてください。」

そう言つと、山根は地下格納庫を飛び出した。山根は携帯を取り出すと、市ヶ谷司令部に連絡を取つた。

「・・・そうだ。岐阜基地に直ちにスクランブルをかける。あそこには新星改と新型ミサイルが試験配備されているはずだ。」

山根は直ちに岐阜基地の新星改部隊にスクランブル命令を下した。

命令を受け取った岐阜基地では新星改6機が30秒と経たずに空に舞い上がった。

新星改は、特殊戦術研究旅団の主力攻撃機新星とは全く別の機体だつた。新星改はF-15Eストライクイーグルをベースに設計された超音速攻撃機だつたが、ベース機のF-15Eの原形は全くどぎめていなかつた。

機体を構成する素材はカーボンナノファイバーを折り合わせた剛性、軟性の両方を兼ね備えた新素材を採用し、機体の対弾性を向上させ、一部にはスーパーファインセラミック装甲を施した世界でも例を見ない非金属戦闘機であつた。

加えて、F-22のエンジンの約1.5倍の推力を誇る、超星2型エンジンを採用、低空における機動性能を向上させているだけでなく、一次元ベクターノズルを持ち、攻撃機でありながら、戦闘機にも勝る性能を有していた。

「さあ、新星改の初陣だ。オロチの野郎に今までのお返しをしてやろつー！」

新星隊長の森三佐が僚機に檄を飛ばした。高推力のエンジンを持つ新星改はアフターバーナーを使わずに音速を超えることができるスパークルーズ能力を持っている。

新星改は音速を突破すると、すぐにオロチを射程にとらえた。

「いくぞ。9式対地穿孔噴進弾発射！！」

新星改部隊から、白い飛行機雲が6つ放たれた。穿孔噴進弾はオロチめがけて真っすぐ飛んでいった。オロチはその巨体を震わせると、周波バリアを展開した。

「バリアか・・・」の9式穿孔噴進弾をただのミサイルだと思うな。

「

穿孔噴進弾はオロチの周波バリアを感知すると、自らもオロチと同じバリアを展開した。バリア同士、干渉しあい、中和されるとミサイルは勢いを衰えさせずにオロチに突っ込んだ。オロチの身体に6本のミサイルが突き刺さった。

ミサイルが爆発もせず、身体に突き刺さったままという光景は、明らかに異常な光景であつたろう。しかし、穿孔噴進弾の真価はここからだつた。弾頭が急速回転するとオロチの身体にさらに潜り込んでいった。

オロチは自分に何が起きたのか分からぬよう、しばらく動くことが出来なかつた。

だが異変は急に起きた。オロチの身体がぼこぼこと中から膨らみ、爆発した。

「いやつた！！！」

森は思わず片手でガツツポーズした。特殊戦術研究旅団が初めてオ

オロチを倒した瞬間だつた。

穿孔噴進弾は、掘削ドリルでオロチの体内に入ると、分子振動マシンをオロチ体内に解き放つ。

巨大な電子レンジが血管中に出来上ると考えてよいだらう。そして分子振動を加速されたオロチの血液は急速に沸騰し内部崩壊を起こし爆発した。

外から倒せないならば内側から倒す。特兵研の対オロチ兵器の切り札の一つだつた。

人類の前に天使という強大な敵が現れた。だが、天敵であるオロチを倒せる唯一の兵器が生まれた。これは人類にとって、確かな前進であつた。

人類は、M機関は天使を倒せるのだろうか。

そして、小森が山根に見せたものは・・・謎を呼びつつ、物語は続いていく・・・

第2話 「激突！ウリエル対まほろば」

激突 ウリエル対まほろば

作戦発動から二日間、地球の衛星軌道上に存在する七大天使の基地、ヴァルハラ。ミカエルは部屋で一人、ウリエルによつて世界の首都が灰燼に帰していく姿を眺めていた。

ミカエルの背後の扉が開くと、長い髪を後ろでしばった背の高い男が入つて來た。

「どうしたんだい？ラファエル。」

ミカエルは後ろを振り返ることなくラファエルに尋ねた。

「生体兵器15号が人間によつて破壊されました。」

ラファエルの声の調子は重かつた。ラファエルの様子を意外に思つたのか、ミカエルは笑い出した。

「はははは。大したことはないよ。ラファエル。僕たちの計画には何の狂いもないさ。それにもつて、大したものだね。生体兵器を破壊するなんて。」

「は・・・」

ラファエルは頷いた。

ミカエルは腰掛けっていた椅子から立ち上がるとなつた。ラファエルの目の前に立つと、指を流れるように動かして、ラファエルの胸にあてた。

「君は心配性だね。ラファエル。もうすぐ、ウリエルが作戦の第一段階を終わらせてくれるよ。」

少年は微笑んだ。だがそれは、暖かみのあるものではなく、どこか妖艶で、人間の持つ根本的な劣情をかき立てるものだった。

ラファエルは冷や汗を一筋たらすと、一礼して部屋を辞した。

ウリエルの持つ神槍「ブリューニク」が放つ高出力ビームによって、世界の主要都市の大半は壊滅した。

ワシントン、ロンドン、パリ、ベルリン、ローマ、ブリュッセル、アムステルダムなど、まず先進国の首都、国際機関の中心となる都市が狙われた。

天使が現れてわずか一日で、500万を超える人名が失われ、その数倍する人間ががれきに埋もれ、さらにその数倍の人間が大きな傷を負つた。

まほろばの艦橋で、まほろばの艦長、敷島昇は燃え盛る各国の首都の映像を見ていた。

「くそ・・・奴の動きさえ分かれば・・・」

天使の動きはまさに神出鬼没で、一度都市を壊滅させると、すぐに空へ消えていった。天使はまほろば同様、ありとあらゆるセンサー

に対する最高のステルス能力を有していた。

電子機器に頼つた先進国はその対処が間に合わず、警戒網をやすやすと突破したウリエルによって、首都や軍事拠点となりうる都市が片つ端から破壊されたのだった。

まほろばは超望遠カメラを有する「影花」を全て策敵に飛ばしていった。しかし、まほろば、影花をもつてしても、地球は広大で、天使の捕捉は困難を極めていた。

「艦長、天使を発見しました。現在、ロサンゼルスから太平洋を移動しています。おそらく、東京を目指すかと思われます。」

モニターに割り込む形で、桜花の姿が現れ、昇に天使発見の報を知らせた。

「よし、機関始動。最大戦速。これより、本艦は天使ウリエルの撃滅に向かう。」

これまで、歯痒さといらただしさに支配されていたブリッジの雰囲気が一変した。

モニターから溢れた光は生氣を取り戻したかのように光輝き、はるか背後ではまほろばの主機関であるS機関が甲高い「うなり」声を上げた。

「現在、第一戦速・・・第三戦速・・・音速突破！」

クルーの背後で音速の壁を突破した轟音が聞こえた。

「最大戦速！」

まほろばはマッハ2・5といつ高速で空に消えていった。

一方、ウリエルは背後にひとりとくつついている小型偵察機の存在にいらだちを覚えていた。何度か撃墜しようと考えたが、その背後にある存在を彼は知っていた。ここで小さな偵察機を破壊するよりも、計画遂行の邪魔者を排除した方が今後の計画に有益と考えたのである。

「ん？ 戦闘機か？・・・かなり速い。」

コクピットのウリエルはモニターに不審な光点があるのを見た。レーダーにもセンサーにも映らない不審な光点を見て、ウリエルは確信した。

「奴か！..」

「発見しました。艦長。奴です。」

ほぼ時を同じくして、オペレーターが艦長の昇に報告した。

「よし、全艦戦闘準備。まほろばの本気を見せてやれ！」

昇は全クルーに檄を飛ばした。副長の真田誠は火器管制クルーに指令を下した。

「全艦戦闘準備。4式衝撃収束飛行爆雷全管装填。主砲選択はレールガン。E号弾を使用する。それから、Bシステムをフルオートに。」

「

まあろばは速力を緩めながら戦闘モードに変形していった。艦橋がせり上がり、今まで空気抵抗を減らすために閉じていたシャッターが展開し、中からまあろばは自慢の51センチ三連装砲塔が一基現れた。また、艦橋周辺や、エンジン周辺など、各所にあつた円形シャッターが展開し、中からレーザー砲が現れた。

一方、天使ウリエルもまあろばの存在に気づき、神槍「ブリューカ」を構え、必殺の姿勢をとつた。

『我が名は天使ウリエル。前方の戦艦、名前を名乗れ!』

堂々とした声で、ウリエルはまあろばに語りかけた。昇はマイクを手に取ると、天使に返答した。

「我々はまあろば。人類の危難から世界を守る者だ。」

「我々の計画を邪魔せんとする妨害者め。我が天の槍の一撃を受けよ!」

ウリエルはそう言つと、ブリューーカから超高出力ビームを発射した。

ビームが炸裂し、辺りは爆煙に包まれた。コクピットの中のウリエルはモニターに映る爆煙に眉一つ動かさずに言つた。

「他愛無い。我が天の槍の一撃を前に敵などありはしない。・・・何!・?」

コクピットの中の警告音が響いた。モニターを見ると爆煙の中から32発の爆雷型のミサイルがウリエルに向けて円状に発射された。

「生体兵器の動きを止めた武器か！？」「しゃくな！」

天使ウリエルは携えていた槍を振り回し、ビームを乱射してミサイルを撃墜したが、誘爆による大爆発は避けられなかつた。

「ぐう・・・」

七大天使の表面を覆う装甲はまほろばの主装甲板であるZ合金と変わらぬ耐熱、耐衝撃性能を持つ。

だが、4発でさえ小型の戦術核と同等の威力を誇るグランド・クルスである。その8倍する威力は想像を絶するものだつた。

『この程度で、我ら天使は倒せん！！』

ウリエルは爆煙をブリューークで払いのけた。

「だが、これならどうだ？誠！！」

「主砲連射！！弾種、I号弾！目標ウリエル・・・撃てえ！！」

I号弾、チタニウム合金弾芯を持つ貫通力抜群の撤甲弾である。

まほろばの主砲は戦況に応じて3種類選択出来る。現在の主砲は3連装、51cm磁力砲、いわゆるレールガンであつた。

極超音速で目標めがけ飛来する砲弾を前に、天使と言えど無傷では済まなかつた。ウリエルは6枚持つ翼のうち、4つを失い、片腕と片足をはじき飛ばされた。ウリエルの各所から火花が飛び散り、無

機質な頭部のメインカメラからは涙のように黒い液体が流れていった。

「もう勝負は決した。降伏しろ。」

昇はウリエルに言った。

「クピットの中のウリエルは凄惨であった。警告音がけたたましく響き渡り、モニターのいくつかは破壊され、彼の白い制服は赤い血に染まっていた。ウリエルは荒く息を吐き、唯一残ったモニターから見える白銀の戦艦を睨みつけた。

「まだだ・・・貴様を道連れに我らが計画を果たす礎とならん!!」

ウリエルはそういうと残った2枚の羽根で突進をかけた。

「誠!!」

「主砲は間に合いません!レーザーを!!」

次の瞬間、まほろばから100を超える光が放たれた。まほろばの対空防御の要、重力偏向式特殊光学光線砲、平たく言えば曲がるレーザー砲である。

100を超える光がウリエルに向かつて行つた。光がウリエルに当たるたび、ウリエルの機体の各部が破壊されていった。翼が頭が肩が、ブリュニクが一つ一つ確実に破壊された。

「まだ・・・まだだ・・・奴に、私は・・・」

傷つきながら、ウリエルは少しずつまほろばに向かつたが、最後の

翼をもぎ取られ、ウリエルの突進は終わった。その間も、まほろばから放たれた光の矢は、容赦なくウリエルを突き刺していく。

『ミカ……エル……さ……』

ウリエルは最後に手を天に伸ばし、爆発した。

「全速後退！！！爆発に巻き込まれるぞ！！Bシステム最大出力！！！」

まほろばの周囲が光の膜で覆われた。オーバーテクノロジーの結晶、バリアである。ブリュー二クの一撃をまほろばはこれで凌いだのだった。

「爆発の衝撃反応、消失しました。」

オペレーターが昇に報告した。昇は眼下の海を見た。青く澄み渡つた。美しい海だった。もともと、軍人ではあったが、好き好んで人殺しをしているわけではない。昇は何よりも好きな青い海を血で染めたことにいらだつた。

「艦長……」

誠はそんな昇に声をかけられなかつた。それはブリッジにいた千尋も、桜花も、他のクルーも同じだつた。

「艦長より、全クルーへ。これよりまほろばは基地へ帰投する。我々の相手は想像以上に強大だ。皆、これからが本当の戦いだ。」

昇は自分に言い聞かせるかのように言った。まほろばは方向を変え

ると、空に消えていった。

ヴァルハラではウリエルの死が天使達に伝えられた。

「・・・」

「・・・そつかあ、死んじゃったんですかあ。ウリエル。」

ラギエルとラグエルは仲間の死にうろたえることなく、ラグエルは黙々と本を読み、ラギエルはラグエルに抱きついてじゅれていた。

「せめて、彼の魂が幸いならんことを・・・」

ガブリエルは十字を切つて仲間の冥福を祈つた。

「あははは！ そんなの、弱かつたから死んじゃったんだよ。ばかだなあ。ウリエル。」

メタトロンが足をばたつかせて言つた。

「メタトロン！ ！」

ラファエルがメタトロンを叱りつけた。メタトロンは小さな身体をばたつかせながら、退屈そうにソファに寝転んでいたが、ぴょんとソファから飛び起きた。

「僕が、作戦の続きをあげるよ。大丈夫。僕のメタトロンは強いんだから！ ！」

メタトロンはラファエルにすいと近づいて言つと、すぐに部屋を出

て行つた。ラファエルは部屋で起こつた一部始終をミカエルに報告した。

「そつか・・・ウリエルが死んだか。それにしても、メタトロンは気が早いなあ。」

ミカエルはヴァルハラから見える地球を眺めていた。仲間が一人欠けたのに、そしてまた一人独断で出撃したと言うのに、ミカエルはまったく意に介していなかった。

「よろしいのですか?」

「ああ、作戦の第一段階はあと東京の破壊を残すだけ。何ともないよ。・・・それとも・・・」

ミカエルは低重力を利用して、一足飛びでラファエルの顔近くまで近づいた。

「君は怖いのかい?仲間を失うことが・・・」

ミカエルは残忍な笑みをラファエルに向けた。

「・・・いえ、そのようなことは・・・」

ラファエルは思わずミカエルから目を背けた。ミカエルはラファエルの耳に顔を近づけて言った。

「メタトロンがつまくやるよ。僕らはただ、座つていればいい・・・

」

中性的なミカエルの声がラファエルの耳にこだました。ラファエルはそんなミカエルに恐怖を感じ、一礼すると部屋をあとにした。

ヴァルハラでは、ミカエルの小さく、低い笑い声がこだましていた。

第3話 「轟音炸裂！四連装46cm砲！」

天使による世界首都攻撃によって、先進国の首都はほとんどその機能を失つた。天使による昼夜を問わない神出鬼没の奇襲攻撃を前に、わずか3日で各都市は壊滅した。唯一壊滅を免れていたのは東京だけであった。

「たかが東京一つ。僕にかかれば楽勝だよ。」

大気圏に突入する天使「メタトロン」の中で小さな足をばたつかせながらメタトロンは言った。彼が操るメタトロンはバリアを展開しながら減速していくた。

空から現れた異常物体を特殊戦術研究旅団所属の早期警戒指揮機あまたらすの超望遠光学カメラがとらえていた。そこには、降下している赤銀に輝く人型の物体があつた。

「司令官。あまたらすから緊急信です。」

陸上自衛隊、市ヶ谷駐屯地地下100mにある特殊戦術研究旅団作戦司令部で旅団長の山根陸将補は天使発見の報に接した。

「あまたらす。映像を出せるか？」

山根は即座にあまたらすに指令を下した。数秒のうちにあまたらすの超望遠カメラにとらえられた天使の映像が送られてきた。

「軌道と方位から算出するに、真っすぐに東京を目指しています。」

あまたらすのオペレーターは山根に報告した。司令部のモニターには巨大な天使の姿が映し出されていた。

「でかいな・・・」

メタトロンは七大天使のなかでも最大の機体で全長は200mに達する。護衛艦一隻を縦にしてもなお余りある大きさは遙か遠くからでも威圧感を放っていた。司令部の一員が映像に釘付けになつていると、突然メタトロンの目がカメラの方を向いた。

「まづい！ 気づかれたぞ！！ あまたらす。ただちに現場空域から離れる！」

「了解」

山根はあまたらすに離脱の命令を出した。あまたらすは旋回して離脱を図つたが、すぐにメタトロンに捕捉された。あまたらすの最高速度は時速800km、天使の中では鈍足とはいえ、マッハ1.5の速力を誇るメタトロンとでは相手にならなかつた。

「あはははー！ でつかい飛行機ー！ でも、いくら下から見張つても、僕らには丸見えだよ。」

メタトロンはあまたらすに追いつくとその大きな翼に取り付いた。あまたらすの防御用機銃である30mmガトリング砲が火を噴いたが、天使相手では豆鉄砲以下の存在でしかなかつた。天使一の巨体にのしかかられてあまたらすの翼にひびが入り始めた。

『つぶれろー！』

メタトロンがそう言つた瞬間、あまてらすは瞬時に爆散した。

「あまてらす・・・反応消失。」

オペレーターが沈痛な声で山根に報告した。

「生存者の救出を急がせろ。それから、東京の全住民に避難命令。4時間以内で完了させろ。迎撃部隊は?」

「現在百里基地から、影電隊が出撃しました。三沢、千歳からも空自の銳光隊が発進しています。あと30分ほどで、接敵します。」

銳光は影電とほぼ同時期に開発され多用途戦術戦闘機だった。影電がステルス性能を極めた特殊戦闘機として開発されたのに対し、銳光は戦域、戦術を選ばない多用途戦闘機として開発された。

外観は影電と大して変わらないが、戦域、用途を選ばない汎用性はあるかに影電を超えていた。翼下ハードポイントにもうけられたマルチラックは空自のあらゆる爆弾、ミサイルを積み込むことができるのでなく、電子線ポッドを装着すれば、電子戦機としても、早期警戒機としても活用出来た。また、多用途戦闘機ゆえにパワー、運動性能が低下すると思われたが、F-15戦闘機と同じエンジンを搭載し、さらに一次元ベクターノズルを導入したことでの運動性、ならびにエンジン出力は申し分無い性能を有していた。

多用途機としての汎用性能の高さ、戦闘機として高いレベルでバランスのとれた性能が認められ、空自の次期主力戦闘機として各地に配備が進められていた。

いち早く銳光が配備された三沢基地、千歳基地から、それぞれ12

機ずつ、合わせて24機の鋭光が飛び立つた。

「筑波に『たじからお』の準備をせかで。あれが恐らく今回の切り札になる。すさのおはづだ?」

山根はオペレーターに尋ねた。オペレーターが答えるより早く、別のオペレーターが山根に報告した。

「司令。すさのおより入電です。」

「わかつた。モニターに出してくれ。」

すぐにモニターに映像が表示された。モニターには口ひげを蓄えた士官が映っていた。すさのお艦長、末永一佐だった。

「山根君。すさのおは配置についたぞ。奴が我々のいる海域の近くに現れたのが不幸中の幸いだつたな。」

「はい。現在の海洋戦力の中で、奴らを倒せる力を持つのはすさのおしかいません。水際で叩いてください。」

山根は一回り年上の艦長に言つた。

「何だ。つまんない。こんなんじや東京なんてあつとこいつ間につぶしちやうよ。」

山根率いる特殊戦術研究旅団が天使迎撃の準備を整えている中、メタトロンは退屈そうに自分の操る天使をゆっくり東京にむけて飛ばしていた。外見も精神もまるで子どもな彼はその自分とは正反対の巨大な天使をひらひらと操つていた。

日本の海岸線からおよそ300kmの公海上でメタトロンは影電隊10機に捕捉された。

「シャドウより全機へやつは世界の都市を焼き払つた奴らの同型機だ。しめてかかれ！」

影電隊長の桑原三佐が部下に檄を飛ばした。

「ターゲット、ロック！ シャドウ。 FOX 3！」

隊長機から2本のミサイルが放たれた。先頭の隊長機にならつて、編隊から次々とミサイルが発射された。自身に迫り来るミサイルをそのままにしたとき、メタトロンは驚喜した。

「あつはははーー！」うでなくつちやーもつと僕を楽しませてよーーー！」

メタトロンは両手を前方に向けると高出力ビームを放つた。ミサイルを全基撃ち落とした。

「化け物め・・・」

影電のパイロット、早瀬一尉が自分たちを見ている天使に毒づいた。

「なら、楽しませてやる！」

桑原は翼端灯を少し点滅させた。隊長の合図に僚機達はすぐに散開して距離をとつた。天使の前後左右。そして上に散開した影電隊は互いが同士討ちしない絶妙のタイミングでミサイルを放つた。

太平洋の公海上で爆音が轟いた。

「はじまつたな。」

影電隊が天使と死闘を繰り広げている海域からほど近い場所に戦艦「すさのお」はいた。

すさのおは日本が大和型戦艦を作り上げて以来、初めて建造された戦艦であった。主砲は大和型からサルベージし、再設計を重ねて改良された46cm四連装砲塔2基、主砲門数では大和型には及ばないが、速射性能、射撃性能は60年の時を経て、格段の向上を成し遂げていた。

さらにはすさのおには国産初のレーザー戦車、瞬雷に導入された高フツ素レーザー砲をも搭載していた。

60年の歳月を経て現代によみがえったもう一つの超超弩級戦艦、それがすさのおだった。すさのおは青銅色の衝角をきらめかせ、洋上に威容を誇っていた。

「ふたたび、46cm砲が海で火を吹く時が来るとはな。副長。」

末永は隣にいた副長に話しかけた。山根と同い年くらいの副長は頷いた。

「はい。今度は日本を、そして人類を守るために・・・いささか、痛快であります。」

「ははは。私達はさしづめ、地球防衛軍と言つたところかな。さて、

戦闘準備だ。」

末永はブリッジクルーに命令を下した。

「索敵開始、敵座標、計算開始。」

「噴進誘導主砲弾、装填。弾種、09式撤甲焼夷弾。」

「高フツ素レーザー砲、座標点固定。攻撃準備完了!」

ブリッジのオペレーターは淡々と、しかし、とてつもない早さで、戦闘準備をおこなった。

「あとは、戦闘機隊が頼りかな・・・」

末永は双眼鏡を向けた。

『あはははー効かないよーそんなオモチャ!ー』

メタトロンは爆風を振り払った。必殺の影電隊のフォーメーションも天使には通じなかつた。ミサイルの攻撃をものともせず、メタトロンは影電を撃墜にかかつた。

「ちい!ー!ー!」

桑原率いる影電隊は一次元ベクター・ノズルをうまく使い、ぎりぎりのところでメタトロンの攻撃をかわしていった。それも限界かと思われたそのとき、空自の銳光隊が到着した。

「待ちかねたぞ!ー!」

桑原は銀に輝く銳光を見た。頼もしい仲間達だつた。銳光は24機一斉にミサイルを発射した。

「よし、俺たちは退くぞーー！」

ミサイルを撃ち尽くした影電は、戦闘を銳光にまかせ、空域を離脱した。

銳光の発射したミサイルは真つすぐに天使メタトロンに向かつた。

『何発撃つても同じだよー』

メタトロンはミサイルをまたも迎撃した。ミサイルはあっけなく爆発し、辺りは爆煙に包まれた。

『他愛無い他愛無い。・・・何?』

爆煙を通り越して、さらにミサイルが72発、メタトロンに襲来した。銳光が全てのミサイルを発射したのである。ミサイルは全て気化爆弾、あたれば天使と言えども傷は免れない。

『ぐそおおおおーーーーー』

72発のミサイルが全てメタトロンに命中し、辺りは高熱と爆煙で覆われた。

それを見た末永はすぐに発射の命令を下した。

「今だーー撃てえーーーー！」

すさのおの46cm砲が発射された。地球上の海で、実に64年ぶ

りに46cm砲の轟音がこだました。

第4話 発進！たじからお

音速を遥かに超えた速度で、46cm主砲弾が天使に向けて飛んでいった。発射から数秒後、ひと際大きな命中音が太平洋上空に響き渡った。

すさのおが発射した09式撤甲焼夷弾は対オロチ用に開発された最新エレクトロニクスの固まりと呼ぶべき主砲弾だった。主砲弾の基部には誘導装置が組み込まれ、正確に目標を打ち抜くだけでなく、硬化チタン弾芯を用いることで、貫通性を高めた主砲弾だった。さらには命中すればノイマン効果による熱噴流によって、敵装甲の内部を溶かす高熱を発するガスを噴射する威力抜群の砲弾だった。

「やったか！？！」

千歳基地所属の銳光隊長、鷹野三佐は爆煙に覆われた天使を見た。

『に、人間の分際で・・・人間の分際でえええ！？！？！』

すさのおの主砲弾と銳光のミサイルとのコンボは確かに、天使メタトロンにダメージを与えた。しかし、それは小さな小さな傷に過ぎなかつた。

見下していた人間相手に自慢の機体に傷をつけられたメタトロンは、激昂した。

『よくも・・・よくも僕のメタトロンを！？！』

メタトロンは辺り構わずに高出力ビームを発射した。それはビームの乱射というよりも、エネルギーの爆発と言った方が正しかつた。

銳光隊24機は直ちに回避しようとしたが、間に合わず、10機が攻撃に巻き込まれ、一瞬のうちに消滅した。巻き込まれたのは銳光だけではない。天使に悟られないようになに幾分距離をとっていたすさのおでさえも、ビームに巻き込まれかけた。

「急速潜航！－いそげ！－」

メタトロンがビームを乱射し始めたとき、艦長の末永は即決した。

「しかし、それでは主砲が水没します－しばらくは撃てなく・・・」

「構わん！－！」

末永は副長の進言を一喝して退けた。すさのおは潜水可能な戦艦であり、船底に電磁誘導推進潜水艦であるつくよみをマウントしていることから、最高で80ノットまで出せる。ビームが減衰する水中深く潜水し、海域を離れる以外に天使から逃れる術はなかったのである。しかし、この手にも問題はあった。主砲を収納しないまま潜航すると、主砲が撃てなくなるばかりか、水圧で主砲塔に浸水する可能性があった。しかし、このときの末永は攻撃力の低下より、艦の生存を最優先した。

「・・・」

末永は天使を仕留めきれなかつた悔しさと、敵から逃れる自分への怒りで無言のうちに拳を握りしめた。すさのおは主砲を収納しながら、海中深くに没した。

『はあはあ・・・』

メタトロンが攻撃を終えたとき、周囲には敵はいなかつた。そのことじごとくが破壊されたか、退却したあとだつた。誰もいない空と海を田にして、メタトロンは笑い出した。

「ははははは！ ！ そうだよ！ 僕は天使なんだ！ ！ 一番強いんだよ！ ！ だれも僕を倒せやしないんだ。」

メタトロンはそういうと東京に向けて進路を取つた。はるかメタトロンの遙か上空で3機の影電が張り付いていた。ステルス性能に特化した機体でもある影電は天使のセンサーにも引っかかっていないようだつた。

「司令。天使が再び動き出しました。」

市ヶ谷司令部のオペレーターが山根に報告した。

「まいつたな・・・まだ防衛線がはれていないぞ。」

山根は頭をかいた。天使発見から一時間も経つていない。このような短時間で部隊を展開させるのは不可能だつた。メタトロンの目標は東京にあることは分かつていたので、山根は霞ヶ浦で天使を迎撃つことに決めた。

「たじからお。出られるか？」

山根は筑波に連絡を取つた。

「応よ！ ！ 任せなー！」

たじからおのパイロットである沼田一佐が答えた。

「たじからおは直ちに発進。田標のコースと速度を算出すると、霞ヶ浦で接敵するはずだ。撃破しろ。いいか。たじからおは俺たちの切り札だ。くれぐれも大事に扱えよ。」

山根は防衛大以来の旧友に言った。

「任せろつて。やいのやいの言つなよ。くれぐれも大事に戦つてやるよ。」

「それが一番信用出来ないんだが・・・」

「ああ！？何か言つたか！？！」

「生きて帰つて来いつて言つたんだよ！たじからお、発進！！」

山根はたじからおに発進命令を出した。山根の命令一下、筑波ではたじからおの発進シーケンスが開始された。たじからおを拘束していたクレーンなどがはずれ、天井のシャッターが一つずつ開き始めた。格納庫の床では、防火板が競り上がり、ロケットの噴射に備えていた。

「たじからお。 いつくるぜ！？」

沼田はそう言つと、たじからお背面のブースターを点火した。爆音が轟き、たじからおの巨体が宙に浮かび、舞い上がつていった。

第5話 天使対巨人

たじからおは正式名称を10式拠点防衛用人型機動要塞試作機といふ。いわゆる巨大ロボットと考えれば良い。オロチに対する遠距離兵器が有効ではないという意見を受けて、オロチを格闘戦によって駆逐すると言うアイデアが生まれた。このアイデアを具現化した機体がたじからおだった。遠距離攻撃用の武装を持たず、あくまで接近戦による格闘を主眼において設計されたため、極めて強固な装甲と、それを補い、オロチを駆逐するパワーを獲得していた。そして、その巨大さは天使に迫るほど大きなものだった。

先日山根は、対天使の切り札として、たじからおを視察したのだった。

現代において、人型、二足歩行のロボットを作り出すことは理論的には十分可能である。しかし、そのエネルギー源をいかに供給するか、そして、戦闘用一足歩行ロボットという荒唐無稽な代物をだれが必要とするかと言う点がロボットを生み出す最大のネックだった。

しかし、ロボットを規格外に巨大化することでエネルギー・ジャーク・ターナーを積み込むことが可能になり、さらに、オロチと言うやはり規格外で荒唐無稽な生物が迫り来る危険として存在することが、たじからおを誕生させしめたのである。

たじからおは背面の大出力ラムジェットエンジンを噴射させ、天使に向かって飛んでいった。

一方、天使メタトロンはその視界に日本の海岸線をとらえていた。

「はははーもうすぐ東京だ。破壊して、破壊して、紅蓮の炎で燃やしきくしてやる。」

『悪いが、そうは問屋はおろさないぜーーー』

メタトロンが上を見ると、刀を振りかぶったたじからおが落下して来た。メタトロンは腰にマウントされたハンドアックスを手に取つて、たじからおの斬撃を受けた。

『な、なんだお前ーーー？僕たちと同じ姿いやがつて・・・ーーー』

メタトロンとたじからおは刀と斧を合わせたまま地表に落下していつた。

「かあああああつーーー！」

たじからおは地表につく寸前、メタトロンのハンドアックスを払いのけて、眼下の霞ヶ浦に着水した。着水と同時に、霞ヶ浦に大きな水柱が一つ立ち上った。

『問われて名乗るもおこがましいが・・・知らざあ、言つて聞かせましょーーー！特殊戦術研究旅団所属10式拠点防衛用人型機動要塞試作機、たじからお様だあーーー』

沼田はたじからおの外部マイクを全開にして名乗りを上げた。その様子を市ヶ谷地下司令部で見た山根は頭を抱えた。

「あの、馬鹿・・・」

『さあ、いくぞ天使ーーーいや、尋常に勝負ーーー』

たじからおは刀を振りかぶつて、天使メタトロンに突進した。メタトロンはハンドアックスをきらめかせ、刀に対応した。たじからおの刀、「むらくも」は日本が誇る鍛造技術の粹を集めた国内最大の日本刀だった。切れ味は日本のどの日本刀よりも優れていた。かたや、メタトロンのハンドアックスは分子振動装置を備えたオーバーテクノロジーの産物だった。どちらの武器が先に限界に達するか、火を見るより明らかだった。すぐにむらくもの刀身にひびが入り、両断した。

むらくもの半身が、霞ヶ浦に突き刺さった。

『はははは！…！…そんなやわな包丁なんて、メタトロンには効かないよ…！』

メタトロンはハンドアックスを両手に構え、たじからおに面した。

『ははは。やるじゃねえか！…！…』

たじからおはむらくもを打ち捨てる、ファイティングポーズをとつた。

『たあああああ！…！…』

メタトロンは背中の翼を開け、たじからおに突進した。

『でえええええい！…！…』

たじからおはメタトロンの手首をつかむとふり飛ばした。片手にぎったハンドアックスを奪うと、たじからおはメタトロンに斬撃を

加えた。

『「JのJーー』』

メタトロンはもう一方の手に握ったハンドアックスでたじからおの斬撃を受け止めた。互いの分子振動ブレードが共振し、火花が散つた。

『ちいいいーーーー』

沼田はレバーを引き、たじからおの出力を上げた。

『メタトロンを・・・なめるなあーーーー』

メタトロンもまた出力をあげ、たじからおの力を押し返そうとした。だが、二体の出力に耐えられず、双方のハンドアックスが爆発して吹き飛んだ。

『くそおーーーー』

メタトロンは一飛びして、距離をとると高出力ビームを発射した。

『ぐりうかーーー』

たじからおは右前腕にマウントされた盾でガードした。ビームは反射して、あさつての方向に反れていった。特兵研が開発した、光学反射防盾「八咫の鏡」である。オロチの光弾の性質を分析、研究した特兵研は通常のビーム同様、反射が可能であると結論づけた。オロチとの格闘戦を主眼に入れて設計、開発されたたじからおは当然に考えられたため、それを防御するために光弾攻撃を防御する盾が

標準装備されていた。

アメリカ艦隊を壊滅させ、各国首都を壊滅させた天使のビーム兵器
がはじかれた。このことにはメタロンはショックを隠せなかつた。

メタトロンは拳を握り、たじからおになぐりかかつた。たじからおは左腕を前に出し、ガードした。しかし、天使はオロチを遙かに超える存在である。もともと、オロチとの格闘戦を主眼に入れたたじからおでは出力に違いがあった。たじからおの前腕が爆発して弾けとんだ。

「ちつ！」

「クピットの中の沼田は直ちに警報音をきり、メタトロンと距離をとった。まともに戦つてはたじからおに不利は免れない。たじからおは天使の間合いぎりぎりの場所で動きを止めた。だが、沼田の中には天使を破る秘策が一つだけあつた。合気道、柔道、剣道の達人である沼田は、メタトロンが隙を作る一瞬を待つていた。

「ああ・・・来いよ・・・天使野郎」

沼田は舌なめずりして時を待つた。

『は！ははは！やつぱり！人間なんかが天使にかなう訳ないんだ！僕は・・・僕は・・・強いんだあ！！！』

メタトロンは翼を広げ、渾身の力を込めてたじからおに突進した。

「今だ！！」

たじからおは一瞬の時を見逃さなかつた。メタトロンの手首を握り、その巨体の懷に入ると、メタトロンの突進力を利用して一気に投げ飛ばした。

『でりやあああああああ！……』

メタトロンは突進した勢いのまま、浅い霞ヶ浦の湖底に叩き付けられた。霞ヶ浦の水柱がまた大きく上がつた。

「がつ・・・」

「クピットがショックで激しく振動し、『クピットの中のメタトロンは『クピットの様々な場所に身体を打ち付けられた。天使そのものの損害も尋常ではなく、全ての翼が脱落し、右腕は折れ、各部から火花が飛び散つていた。

『この・・・この・・・』カエルから『えられたこのメタトロンを・・・』の、『の野郎！……』

メタトロンは片腕のたじからおめがけて、再び突進していった。それはさながら、かなわない大人に何度も向かつて行く子どものようだつた。

「ガキが・・・」

言い捨てると、沼田は自分の近くに突き刺さつていたむらくもの刀身を拾い上げた。絶叫しながら、突進していくメタトロンの胸にたじからおは刃を突き立てた。分子振動がなくとも、日本の技術の粹

を集めた最高の切れ味を誇る日本刀である。天使の特殊合金を貫き、コクピットのメタトロンを串刺しにした。

「う・・・僕・・・死・・・んじゅうの?・・・ミ力・・・」

そう言って、メタトロンは絶命した。動力炉を破壊されていないため、コクピットを破壊されて制御を失ったメタトロンは霞ヶ浦に膝をついて機能を停止した。

沼田はコクピットハッチを開け、外に出た。生暖かい湖の風が沼田を叩いた。沼田は胸ポケットに入っていた煙草を一本取り出すと火をつけた。

「ばかやろうが・・・ガキがいきがつて戦うんじゅねえよ・・・」

沼田は寂しげに言った。火のついた煙草が墓標代わりに宙を舞った。

「つまい煙草ぐらい知らねえと、あの世に行つても楽しみがないだろ?。存分に味わつていけよ・・・」

風に乗つて沼田の煙草が天高く舞い上がつていった。

「沼田・・・」

司令部から沼田の様子を見ていた山根は防大時代からの友人を見守つていた。山根の周囲では天使の初撃破に沸き立つていた。

その数分後遙か東京の上空に到達したヴァルハラでは、ラファエルがミカエルにメタトロンの死と計画失敗を報告していた。

「そりか・・・メタトロンも死んだか。」

一瞬、ミカエルの表情が曇つたように、ラファエルには見えた。しかし、次の瞬間にはミカエルは何事もなかつたかのように振る舞つていた。

「さわいなことさ。僕らの計画には寸分の狂いもないよ。ガブリエル・・・」

ミカエルはガブリエルを呼んだ。

『はい、ミカエル様。』

ヴァルハラの上部構造物に腰掛けた天使ガブリエルは超長距離ライフルを構えていた。

『せめて、彼らの魂が幸いならんことを・・・』

ガブリエルはミカエルの命令のもと、静かに、そしてゆっくりと引き金をしぼつた。ラファエルのライフルから、超高出力のビームが発射された。

勝利に沸く市ヶ谷地下司令部に異常な振動と爆音が響き渡つた。天井は崩れ、司令部にいた全員は振動に耐えきれず床に叩き付けられた。山根を含め、何が起こつたのか分かつた人間はいなかつた。

「な、なんだ！？」

数秒の後、振動が収まつた。山根は皆の無事を確認すると扉を開け、階段を上ろうとした。しかし、その上には彼の想像を遥かに超える

ものが広がっていた。それは澄み渡つた青い空だった。

わずか一階分。5mほど上がった場所で、山根は膝を折った。そこには巨大なクレーターがあつた。都庁も、浅草寺も、東京タワーも、国会議事堂も存在しなかつた。東京は文字通り消滅していた。

山根はそらに向けて絶叫した。山根の悲痛な声が、何も無くなつた数分前に東京と言われた場所で空しくこだましていた。

第6話 消滅！首都東京！！

ガブリエルの高出力長距離ライフルの一撃で東京は消滅した。天使の急襲によつて、避難行動が間に合わなかつたこともあり、東京に暮らす約1,000万人が一瞬で犠牲になつただけでなく、ビームの衝撃で巻き上げられた土砂やがれきが周辺都市に降り注ぎ、被害は千葉、神奈川などの他の県にも及んだ。政府中枢も例外ではなく、官僚、閣僚のほとんど全員が犠牲になり、ここに首都、東京は壊滅したのだった。

山根は草木ひとつ、生命の痕跡すら残つていなかつて東京であつたクレーターを眺めていたが、ある異変に気づいた。土砂によつてせき止められていた川の水が流れ込み始めていたのである。山根のいた司令部はクレーターの底部に位置するため、水没するのは時間の問題だつた。山根はすぐに司令部に戻り、部下達に叫んだ。

「すぐに救援を呼べ……！」はすぐに水没するぞ！！」

電源も落ち、通信もままならない状況であつたが山根はそれでも非常用の信号弾を探し出し生き残つた部下達と共に司令部を脱出した。荒涼としたクレーターに姿を変えた東京を見た司令部の面々は、皆膝を折つて崩れ落ちた。

「なんで……こんな……」

オペレーターの一人が拳を力なく地面に振り下ろした。

「今は絶望するより、生きることだけを考えるんだ。」

山根は信号弾の入った銃を上に向けて構えると引き金を引いた。小さいが、山根達にとっては命綱ともいえる信号弾の光が細くちいさく伸びていった。

偶然、山根の放った信号弾をすさの艦載機、AV-8J2ハリアー改が発見した。ハリアーは山根達の無事を確認するとそのままに救援の要請を打電した。

すさのおから連絡をうけて東京湾に展開していた、改そうりゅう型護衛艦、「うんりゅう」から直ちに3機のSH-60Kが飛び立った。山根達に水がせまる寸前、山根達は到着したSH-60Kに助け上げられた。最新鋭ヘリコプターのSH-60Kはすさのおまで山根を運ぶと、山根はすさのおに臨時司令部を設置した。

「東京の仇は、いのすそのおでどる。」

山根は天使に向けて静かな怒りと闘志を燃やしていた。

第7話 それぞれの悲しみ

一方、人工衛星と、東京に密かに偵察飛行させていた影花からの映像によつてM機関の面々も東京消滅の瞬間を目の当たりにしていた。南太平洋の絶海の孤島の地下にある司令室のモニターを見ていた、まほろば艦長の昇も、副長の誠も、千尋も何も癒えな~~k~~ッタ。ただただ一瞬の出来事で信じがたいことだったからである。

M機関の司令室の面々がその残酷な、そして悪夢のような事実を受け入れるまでに十数秒の時間を要した。昇のすぐそば、わずか5mほど先のオペレーター席から大きな音が聞こえた。その場所に座っていた女性オペレーターが椅子から崩れ落ちたのである。

「・・・お母さん・・・お父さん・・・」

オペレーターの目から止めどなく涙があふれ、嗚咽を漏らしていた。隣に座つていたオペレーターが彼女に肩を貸し、司令室を出て行つた。

「すみません・・・俺も少し出でます・・・」

千尋もまた、悲しみと怒りを精一杯抑えた声で出て行つとした。

「千尋さん・・・」

「桜花さん。すまない・・・今はひとつにしてくれ・・・」

心配する桜花に目も合わせず、千尋は司令室の扉を開け、出て行つた。司令室に自動ドアの閉まる乾いた音が空しく響いた。家族を失

つた昇はともかくとして、M機関に新しく加わった隊員の多くは家族を東京に残している者が大勢いた。生きて一度と会えないかもしれない。しかし、残して来た家族を守ると言つ使命感もまた、M機関の隊員を動かす原動力の一つだつた。天使は無情にもそれを一瞬で焼き払つた。昇は拳を握りしめた。

「天使め・・・許さん・・・」

昇もまた、天使に向けて闘志を燃やしていた。

「先輩・・・」

誰もいない廊下で、千尋は泣いていた。東京にいた編集長も犠牲になつていて。編集者になりたてのときからフリー・ライターになつてからも、何かと気にかけてくれた先輩の思い出が走馬灯のように千尋に駆け巡つていた。未練はないはずなのに、一度と会えないと覚悟していたはずなのに、千尋の心の中は制御しようのない喪失感で一杯だつた。

「先輩・・・」

泣きながら、千尋は無機質な廊下の壁を何度も何度も殴つた。千尋の鳴き声と、廊下を叩く音が寂しくこだましていた。

第8話 策謀の宇宙

そのころ、地球の衛星軌道上にある天使の秘密基地、ヴァルハラでは消滅した東京を見て笑っていた。

「あははは・・・一瞬だ！ もろいものだね。人間は。」

「ミカエル様・・・」

高笑いをするミカエルの背後でラファエルはミカエルに対して恐れを抱いていた。残酷な笑みを浮かべながら、数千万人を一瞬で殺戮する存在。自分たちは世界を浄化するためにその力を使っているのではないか。ラファエルの中にミカエルに対する不信と疑念が生まれ始めていた。

そんなラファエルの感情を読んだのか。少年は振り向いてラファエルに言った。

「僕が怖いかい？ ラファエル。」

凶星をつかれたラファエルは一瞬返事をためらつた。

「・・・いいえ・・・」

「そう・・・」

少年は残酷な笑みを絶やさずに恐ろしいまでの殺氣をラファエルに放った。人間の持つ根源的な恐怖をラファエルを感じていた。心臓は高鳴り、白く美しい顔には冷や汗が滴り落ちた。ミカエルが一步

近づくたび、ラファエルは無意識のうちに下がった。

「それでいい。ラファエル。君は、君だけは僕を恐れてくれていて欲しい。・・・永遠に・・・」

ラファエルは主の言葉を聞くと部屋を辞した。ラファエルは廊下で出撃から戻ったガブリエルと会った。ロングヘアに眼帯の美女はいささか物騒な形容であるがガブリエルはそれ以上に周囲を落ち着かせる不思議な雰囲気を持つた女性だった。

「出撃、じ苦労だった。残酷なことを君にはさせてしまった。」

「いえ。これも計画のため、世界のためですか？」

ガブリエルの声には迷いがなかった。ガブリエルはラファエルの表情を見て、微笑んだ。

「優しいのですね。」

「そうなのだろうか。私にはわからない。」

ガブリエルの唐突な一言にラファエルは返した。

「はい。私達の計画のために犠牲になつた人々のことを思つていらっしゃるのですから。」

「そうか。」

ガブリエルはラファエルに頷くと自分の部屋へと戻つていった。

ガブリエルと別れたラファエルは、窓から見える地球を見た。未だ美しさを保っている青い海が、ラファエルの目に映っていた。

東京消滅の翌朝、天使による初攻撃から四日目、天使ラギエルと天使ラグエルは太平洋上空で静止していた。眼下には島も何もなく、ただ、青い海だけが広がっていた。

「用意はいい？ ラグエル。」

コクピットのラギエルはラグエルに通信を開いた。ラグエルはコクピットのモニターごしにうなづいた。

「よおし！ 計画の第一段階！ 発動だ！！」

第9話 人類滅亡計画

天使ラグエルの頭部にマウントされた天使の環が光り輝きだと同時に、天使ラグエルはその手に携えていた本状の武器を開いた。天使ラグエルは七大天使の中で唯一戦闘用兵器を一切持たない電子戦専用統合作戦機であつた。

戦闘能力を全く持たない機体であつたが、その能力は他の天使と比べて全く遜色はなかつた。ラグエルの持つ本状の兵器「アカシック・コード」が光りだした瞬間、世界に異変がおきた。

「大変です！ICBMの発射システムが何者かからのハッキングを受けています！一次防壁を突破、サブシステムへの介入を開始されました！！」

辛うじて、ウリエルからの攻撃を免れたNORADでオペレーターが叫んだ。核兵器の中枢がハッキングをうけたのである。最悪、核ミサイルが世界中の至る所に飛来する事態が良そうされた。

「ただちに防壁を展開、メインシステムに入り込ませるな。」

「第一防壁展開・・・だめだ！突破されました。メインシステムをカット！！」

「全てのサブシステムからハッキングを受けています！！」

司令官は司令部としての機能が停止するのも構わずに、全ての電源を落とした。来んコードを動かす電源がなければハッキングされることはない。少しは時間が稼げるはずだつた。

「今頃は・・・どの核保有国も・・・」

アメリカの司令官は他の国の事態を思いやつた。こんなときにはこんな攻撃を仕掛けてくるのは天使しかいない。天使の目的が世界核攻撃荷あると分かつた今、天使を倒す以外にこの事態を開拓する方法はなかつた。

「しかし・・・どうやつて？」

この認識は各国の指揮官の共通認識だつた。各国の軍事力は天使だけでなくオロチにすら有効打を持つていなかつたのである。

そんなんか、あらゆる通信回線が天使によってジャックされ、ミカエルの映像と声が世界にふたたび現れた。

「我らの天の槍にその身を焼かれた人類よ。次は自ら生み出した悪魔の炎で身を焼かれ、滅ぶが良い。明日、グリニッジ標準時午前零時をもつて人類は滅亡する。妨害したくば、子の座標に天使はいる。せいぜい止めてみるがいい。」

ミカエルはラギエルとラグエルの居場所を示し、通信をきつた。人類滅亡まであと30時間。人類の存亡をかけた戦いが始まった。

第9話 史上最大の空戦

ミカエルの宣告からわずか数時間後、太平洋上の各基地に集められるだけの空中給油機、戦闘機、AWACSが集結した。太平洋の中心にいる天使をとりかこむかのように、太平洋の島々の飛行場、空港は軍用機で埋め尽くされていた。

あとは各国の足並みをそろえるだけだった。

天使攻撃作戦の総指揮は執り行い、ミサイルの飽和攻撃によって、天使をしとめる作戦が決定された。シンプルで原始的な作戦であるが、作戦の桁が違つた。

参加航空機数2,000機以上、ミサイルの総数は1万発以上、まさに空前の作戦だった。

翌日、正午をもって、天使撃滅作戦が発動した。

「つまくいくといいが・・・」

作戦空域から、遠く離れたすさのおの艦上で、山根は作戦を見守っていた。山根自身指揮を執りたかったが、時間と距離の関係上、すそのおではかけつけることができなかつた。一本からは特殊戦術研究旅団の新星改、影電、空自からは鋭光、F-15J、合わせて100機がこの作戦に参加した。

「これだけの戦闘機が一同に会するとは壯觀なものだな。」

F-16Cパイロットの、マイケル・シュニッセン中尉は空を埋め尽

くす戦闘機の群れを見ていた。これから天使を撃滅する。不安はあつたが、かつて敵として戦っていた国の機体を見たとき奇妙な気持ちに襲われた。

人類を救う。ただそれだけのために国や民族の垣根を越えて一体になれるものなのか。

ファイターパイロット達は今、不思議な連帯感で結ばれていた。

「目標視認！」

編隊長はAWACSのオペレーターに言った。天使はそれぞれ巡洋艦並みの大きさを持ち、翼をも含めると、艦艇もしのぐ。

そのため、離れた場所からでも姿を見ることが出来た。

「了解。編隊各機、攻撃を開始せよ。」

オペレーターは淡々と、そして冷静に攻撃開始の命令を出した。

「アルファリーダー、FOX3!!」

先頭を飛んでいたF-22ラプターが空対空ミサイルを発射した。それに続いて、後続の1,800機の戦闘機からミサイルが次々と発射された。1,800基のミサイルは白い尾を引きながら、天使に向かって飛んでいった。

「すごい数ですねえ・・・でも、ラギエルの前ではこんなもの!!」

天使ラギエルは天使ラグエルを守るかのようにミサイルの前に立ち、

バリアーを開いた。バリアーが2体の天使を包んだ瞬間、1,800基のミサイルが天使に到達し、爆発した。

「やったか？」「

ショニツツは、爆発地点の上空をフライパスした。ミサイル1,800基分の爆発、しかもそのうちの200は燃料氣化爆弾という念の入れようで、天使と言えど無事では済まないはずだった。

爆煙が晴れ始めたとき、煙の中から何かが光った。

「何だ？」

ショニツツが光を見た瞬間、後ろの僚機が爆発した。後ろだけではない。戦闘空域全体で謎の爆発が起きていた。

「天使の攻撃だ！かわせ！かわせ！…

編隊長からの無線がショニツツの耳に入った。だがその司令から5秒もたたずく間に編隊長からの通信は途絶えた。

空はもはや地獄絵図と化していた。

「おい、なんだよあれは！？」「

「避けられない！…うわああああ！…」

「ち、ちくしょう…」

どの無線からも、悲鳴と爆音、パイロット達の断末魔の叫び声が聞

こえたきた。

「野郎！……」

シユニッツは機体を翻し、天使のもとに向かつたが、すぐに光にとらえられた。

「畜生・・・畜生！……」

シユニッツはトリガーを引き、ミサイルを全弾発射したが、その代償は大きかつた。ミサイルを発射した直後、光がシユニッツのF-16Cをつらぬき爆碎した。

「全機撤退！くりかえす。全機撤・・・」

撤退を呼びかけ続けたA W A C Sも、光に貫かれ、爆発した。攻撃開始からわずか7分で攻撃隊は全滅した。爆煙が晴れ、絶望が天使に姿を変えて現れた。驚くべきことに天使は無傷だった。

第10話 危うし！NORAD！！

ラグエルとラギエルの周りを羽根のよつたものが円を描くように飛び回っていた。ラギエルの持つ唯一の攻撃用兵装「セラフィック・フェザー」である。天使ラギエルは戦闘能力を持たない天使ラグエルとの連携作戦を主眼において設計された機体であり、七大天使中最高の防御力を誇る機体でもあった。高出力バリアーだけでなく、フェザーによる近接物理防御もまた、ラギエルを最強の防御力を持つ天使足らしめている理由だった。

ラギエルの翼に2・525枚格納されたフェザーは、操縦者であるラギエルの意のままに敵を追尾し攻撃する武器で、一つ一つの攻撃力は決して高いものではなかつたが、広範囲に、そして多くの目標に対して使用出来る攻防一体の兵器だった。

ラギエルはフェザーを収納するとラギエルに言った。

「ラグエル。敵は私が倒しましたよおーー今度はラグエルの番です！」

コクピットのラグエルは頷くと、アカシック・レコードを輝かせた。

「電源、復帰しました！」

電源を切り、暗闇になつたはずのNORADが突然光を取り戻した。

「馬鹿な！？非常用の電源ですら切つたはずだ！！」

司令官は驚いていた。電源をカットすれば、機械は動かない。それ

なのに動かないはずのマシンが動き始めたのである。

ラグエルは、あらゆる媒体、あらゆる機器を一つずつ調べ上げ、マシン本隊に残っていたわずかな電圧を見つけ出し、システムを復旧、主電源を回復させたのだ。

そして、それはアメリカだけでなく、ほとんど同じ処置を行つていた核保有国全てに、行われていたのである。通常の人間ならば、長い時間をかけてやり遂げる作業をものの数分で片付けたのはアカシック・レコードのおかげであつた。

アカシック・レコードは天使が持つ兵器の中でも最も複雑で、広範囲をカバーする兵器であった。ヴァルハラとのリンクにより、全地球をその攻撃範囲におさめる能力と、あらゆる機器を制御下に置き、操る能力は人類の常識を遥かに超えた存在だったのである。

「ダメです！ 第18防壁、突破されました。」

「電源ダウンできません。このままでは……。」

オペレーター達の必死の抵抗をあざ笑うかのように、侵入者はその速度を上げていった。そのとき、司令部の自動ドアが開き、金髪をオールバックにした若い男が入つて來た。

「このディスクのデータをインストールするんだ。これで少しだけ時間が稼げる。」

男はオペレーターにディスクを差し出すと、コンピュータにデータをインストールさせた。データが読み込まれた瞬間、侵入のスピードが急激に落ちて止まつた。

「侵入、停止しました。」

「予想以上に効いたようだな。間に合つてよかつた。」

男は胸をはつて、深く息を吐くと、司令官に言った。

「危なかつたな。ウイルソン。あともう少しでメインシステムに侵入されるところだつたぞ。」

息子のような年齢の男に無遠慮に言われ、司令官は少し不機嫌な表情で言った。

「まったく、年長者はもつと尊敬するものだぞ。マックス。それよりも、お前、今何をした？」

NORAD司令官のウイルソンはマックスに尋ねた。マックス・シーザー博士。若くしてアメリカのコンピュータシステムの権威となつた天才であつた。

「コンピュータウイルスを仕掛けたんだ。原始的だが、無限にプログラムを増殖し奴を蝕み続ける。だが、そうはもたないだろう。恐らく2時間と言つたところか。」

たつた2時間、天才と言われるものの頭脳をもつてしても、天使を止める時間は2時間が限度だつた。

「短いな。」

ウイルソンは言った。

「だがそもそもいつてられないさ。やれるだけのことをしなくてはな。よおし、全員力を貸してくれ。人類滅亡阻止のための時間を稼ぐんだ。一分でも、一秒でも多く。」

マックスはスタッフ達を集めると指示を出していった。

「・・・！」

マックスが天使ラグエルの攻撃を阻止したとき、ラグエルは違和感を感じていた。

「どうしたんですか？ラグエル。」

ラグエルは無口な相棒に言った。

「少し、攻撃を邪魔されただけ、計画には問題ないわ。」

「そうですか・・・よかつたあ。」

「3時方向から高エネルギー反応。」

「え？」

天使ラギエルはすぐさまバリアーを張り、攻撃を防いだ。天使ラギエルと天使ラグエルは攻撃を受けた方向を向いた。

「まさか・・・奴が！？」

こんな攻撃が出来るのは天使以外でただ一つしかない。ラグエルは

モニターを睨みつけた。

天使の視線の先には白銀の戦艦、まほろばがいた。

「・・・まさか、あの攻撃を防ぐとはな・・・みなみなならぬ防御力だ。」

最強の防御力を持つ天使と、地上最強の攻撃力を持つ戦艦との戦いが今、始まろうとしていた。

第11話 人智を超えた攻防

「あの防御相手にこの出力では無理か。主砲選択、51cm陽電子砲のまま機関出力最大で発射だ。」

まほろば艦長の敷島昇は、火器管制オペレーターに命じた。

「了解。発砲諸元入力、および、出力調整開始。次射まで、あと20秒。」

まほろばの主機関であるU機関がうなりを上げて光り輝きました。

「艦長、発射準備完了です。」

「撃てえ！！」

まほろばの三連装主砲塔2基から6本の光が飛び出した。光は海を割らんとする勢いで空を駆け、ラギエルのバリアーを直撃した。

「ぐう・・・ぐぐ・・・」

コクピットの中のラギエルはけたたましく鳴る警告音とデータの海と戦っていた。ラギエルのバリアーもまた、最大出力でまほろばの攻撃に耐えていた。

「まだ、まだ大丈夫。この攻撃なら、バリアーは耐えられる・・・」

「ラギエル。さらに高エネルギー反応。ミサイル多数、数、216。」

「

ラグエルはラギエルにさらに攻撃が来ることを教えた。

「ミサイルは心配ない。私に任せて。ラギエルは高エネルギー体にだけ集中して。」

ラグエルはアカシックレコードを煌めかせると2体に来襲するミサイルを自爆させた。

「ラグエル。もう一つのエネルギー体は防ぎきれない。よけますよーー！」

そう言つと、2体はすぐに身を翻しまほろばの硬X線レーザーを避けた。攻撃を避けられたことに安堵した一人だったが、一瞬でそれが打ち消された。避けたはずにビームが自分たちに向かつて来たのである。

「バリアー！・・・間に合わない。ラグエルーー！」

太平洋上空で大爆発が起きた。

「ナイスフォローだった。桜花。」

「ありがとうございます。艦長。」

モニターに映る十一単の女性は微笑んだ。まほろばの艦載機、零式桜花は機首に硬X線レーザー用の反射鏡を備えている。昇はまほろば最強の兵器である艦首砲を反射させて天使を攻撃したのだった。バリアーを張つていらない状態で艦首砲の一撃を受けたのだ。最高の防御力を持つ天使と言えど、大破もしくは破壊は免れないだろう。

昇は爆煙に覆われた空を見た。すると爆煙から光が煌めいた。幾筋もの光が不可思議な軌道を描いてまほろばに襲いかかった。

第1-2話 危うし！まほろばー！

煙が晴れ、中から二体の天使、ラギエルとラグエルが姿を現した。だが、この二体の姿は対照的だった。ラグエルはほとんど無傷だったのに対して、ラギエルは両腕がなく、白く美しい無機質な姿はオイルと火花と熱で、醜く、どす黒く変わっていた。ラギエルは自らの身と引き換えに、硬X線レーザーからラグエルを守り抜いたのだった。恐らく他の天使では、戦闘力を意地すら出来ないであろうダメージの中で、ラギエルはなおもフェザーを操つてみせた。

「よくも私のラギエルをこんな姿に・・・許さない・・・許さない！――」

フェザーはラギエルの怒りに反応するかのように、まほろばめがけて飛んでいった。昇は迫り来る攻撃の回避を桜花に命じた。

「Bシステム急げ！――」

「はい。」

桜花が目をつむった瞬間、まほろばは光の膜で覆われた。フェザーはその光に近づくことができたが、その膜に触れることなく軌道をそらされていった。

「Bシステム。順調に作動中。敵飛翔体の攻撃は第一層で遮断されています。」

桜花は目をつむったまま昇に報告した。まほろばはもともと、宇宙空間での戦闘を考慮に入れて設計されている。宇宙空間の戦闘であ

れば、多数のスペースステープリとの衝突も十分に予想される。このために開発されたのがBシステムだった。エネルギー障壁を3層に分けて、超高速で迫り来る物体の衝突を無力化し、宇宙空間での活動領域を広げたこのシステムは戦闘にも応用出来た。

第一層の斥力場では、物理攻撃を跳ね返す、または軌道を変え、第二層の電磁シールドではビームなどのエネルギー体を防御し、第三層の分子振動フィールドでは衝撃波を無力化する。この三層に渡るバリアーが天使の攻撃を完全に防御していた。

「そんな・・・私のフェザーが・・・くそ・・・」

自分の武器が通じないことにいらだつたラギエルはさらに推力をアップさせてフェザーをまほろばに叩き込んだ。

「艦長！..敵性飛翔体、Bシステム第一層を浸食しつつあります。」

Bシステムは無敵ではない。人が重力に反して跳躍出来ると同じように、斥力を振り切るだけの力を与えれば、斥力場を破ることは可能だった。

「あわてるな。重力偏向式特殊光学光線砲用意。」

まほろばの各部にある円形シャッターが開いた。天使ウリエルにとどめを刺した曲がるレーザーである。

「照準、敵性飛翔体。全てたたき落とすぞ。」

「はい。」

桜花は昇の命令に頷くと、全ての目標に照準を合わせた。

「目標、追尾完了！」

「エネルギー充填よし。」

桜花と火器担当オペレーターはほぼ同時に昇に言つた。

「発射！..！」

昇の号令一下、まほろばから、幾百筋ものレーザーがフェザーを指して飛んでいった。

レーザーの一撃、一撃がラギエルのフェザーを貫き、爆碎した。

「く・・・・」の声！..！」

必殺のフェザーを撃墜され、逆上したラギエルはさらにフェザーを増やした。

「さらに増えたか・・・だが・・・」

まほろばもまた、ビームの連射を浴びせかけた。凄まじい攻防が天使とまほろばの間で繰り広げられた。光と爆煙が交差する戦場で、突然異変は起きた。

「何者から、ハッキングを受けて・・・い・・・ます。制御・・・不・・・能・・・」

桜花がそう言つた瞬間、モニターが消え、まほろばの全ての機能が停止した。

「桜花！！」

昇は桜花に呼びかけたが、桜花からの応答はなかつた。

「艦長！だめです！！全機能ダウンしました！！」

「揚力、もちません！！」

まほろばはバランスを失い、落下を始めた。さらには一〇〇〇を超えるフェーザーがまほろばに襲いかかつた。

「うわああああ！！」

まほろばの艦内は恐ろしいまでの振動に襲われた。フェーザー一つ一つの攻撃力は高くなかったが、1,000を超える数である。その攻撃は少しずつだが確実にまほろばに傷を付けていった。

「落ちる！－じやまものおお－！」

ラギエルの渾身の一撃が命中した。まほろばは爆発を起こして海面に落なし、大きな水柱が南太平洋に上がつた。

第13話 復活への祈り

天使ラギエルと天使ラグエルの攻撃によつてまほろばは太平洋上で撃墜された。人類最後の希望とも言えたまほろばが沈んだことで、人類滅亡は確定的なものになつた。

「あはは。すごい・・・すごい！私達の前に敵はない！！」

ウリエルを倒したまほろばを倒したことでラギエルの興奮は頂点に達していた。

「・・・・

相棒が高笑いを浮かべる様をラグエルは心配そうに見ていた。普段のラギエルはラグエルよりも感情表現は豊かだがここまで顕著に感情を出したりはしなかつた。常にラグエルを守り寄り添うことを考えていたはずだった。まるでたがが外れたように、ラギエルは高笑いを続けていた。

「全員・・・無事か？」

暗闇の中で、昇はブリッジクルーに呼びかけた。

「はい・・・なんとか・・・」

昇の周囲にいたオペレーター達が次々と無事を報告していった。

まほろばが高速空中戦闘を主眼において設計されていることが幸いした。クルーは常にシートベルトに固定された状態で操艦、火器管

制を行なうため強い振動でも体がそれほど揺さぶられる」となく衝撃に耐えることが出来たのだつた。

「しかし、機関が停止し、システムもダウンしています。被害状況も本艦が今どんな状態なのかも分かりません。」

「大丈夫だ。桜花を信じろ。彼女ならきっと、何とかしてくれる。」
その頃、南太平洋の孤島地下にあるM機関の秘密基地では、まほろばが海面に落下していく様子を誠と千尋が悔しそうな表情で見ていた。

「まほろばが・・・沈む・・・」

10年近く追い続け、乗っていた無敵の戦艦。それが今まさに沈む。千尋は一瞬自失した。

「千早博士。かぐづちはー?」

誠は隣でモニターを見ていた千早博士に詰め寄つた。

「かぐづちは今、最終調整中だよ。」

「しかし、このままではまほろばが・・・」

「火器に通じている君なら分かるだろう?カグヅチの火力と出力はまほろばを遙かに凌駕している。それだけにコンピュータと主機の連携が不可欠なんだ。」

「しかし・・・」

「大丈夫。僕が作ったまほろばはそれほどやわじゃない。信じるんだ・・・彼らを。」

千早博士は一人を諭すように優しくそして、強く言った。三人の目の前にはもう一つの巨大戦艦がしづかに目覚めの時を待っていた。

第14話 復活！まほろば！

太平洋の暗い海の底で、かすかだがはつきりと電子音が響いた。電子音が聞こえて数秒後、まほろばの内部が息を吹き返したかのようになに光を取り戻した。桜花がラグエルの電子攻撃に勝つたのだ。

「皆さん。お待たせしました。」

コンピュータの桜花が疲れるはずはないのだが、桜花の表情にはやや陰りがあるのを昇は見逃さなかつた。

「さあ、皆。被害状況のチェックだ。負傷者は重傷者から医務室へ！もたもたしていると、天使はまた何かやらかしていくぞ……！」

昇は皆を鼓舞するため、いつもより力強く、そして大きな声で言った。

「山本君。君は使用可能な火器と残弾数をチェック。桜花をサポートしてやってくれ。」

昇は火器管制オペレーターの山本茜に言った。彼女はもともとまほろばの火器の照準を担当していたが使用火器のモニタリングを担当しているオペレーターが負傷してしまったため2人分の仕事をしなければならなくなつた。

明らかにオーバーワークだつたが、彼女は頷いた。自分の行なうべき仕事が桜花の負担を軽減することを彼女自身知つていたためである。

彼女はすぐに仕事に取りかかり、現在使用可能な火器を昇に報告した。茜に続いてそれぞれの部署から、被害状況が報告された。被害は昇や他のクルーが思った以上に深刻なものだつた。フェザーはまろばの戦力を半減させることに成功していた。対空兵装の要であり、フェザーを確実に撃墜出来る唯一の方法でだつたレーザー砲はその8割が使用不能になり、主砲も51cm陽電子砲一門を残して使用不能になつていた。また、主機のS機関は無事だつたが、海面に叩き付けられたショックにより、補機の球形直列水素核融合炉が緊急停止していた。これはまろばが戦闘時必要ぎりぎりのエネルギーでしか戦えないことを意味しており、艦首砲を最大出力を撃てないことと同義であった。

「幸い、216基のVLSのうち154基は生きています。グランドクルスを使うことは可能です。」

茜は昇に報告した。

「ありがとう。山本君。」

昇は茜の目を見た。危機的な状況ではあつたが、心までは折れない、力強い目をしていた。昇は微笑むと大きな声でブリッジクルーに呼びかけた。

「よし、皆一もよひと頑張りだ！！天使を倒すぞ！」

二体の天使はまろばの沈没した海域の上空で静止していた。感情がたかぶり、冷静さを失っているラギエルとは対照的にラグエルは索敵を行なつっていた。

「破片も大分浮いて来ている・・・もうあの艦は生きてはいまい・・・

・

ラグエルは一瞬だけ気を緩めた。だが、その一瞬がラグエルの運命を分けた。海水面から撃沈したはずの白銀の戦艦が飛び出したのだ。

「艦長、衝角分子振動数順調に上昇しています。」

桜花が報告した。

「よつし、全員衝撃にそなえろー最大戦速！！」

昇の命令とほぼ同時に、まほろばの衝角は天使ラグエルの体を貫いた。音速に近いスピードと最高の硬度を誇るZ合金、そして分子振動装置を備えたまほろばの衝角攻撃にラグエルは一瞬で五体を引き裂かれ、爆発した。

ラギエルは後ろを降り向く間も、相棒の最期を看取ることも出来ぬまま、ラグエルの爆発に巻き込まれた。

「ラグエル！……」

その頃、遠く離れたNORADで異変が起きていた。

「ハッキング、停止しました。」

「システム、回復します！」

オペレーター達がラグエルの脅威が無くなつたことを報告した。異常を示す表示が0になつたことを確認したマックスは安堵のため息をついた。

「どうやらい、何者かが天使を破壊してくれたようだな。」

「しかし、一体誰が……」

傍らにいたNORAD司令官のウイルソンがマックスに尋ねた。

「決まっているだろ。あの謎の白い戦艦さ。60年前、我が軍の機動部隊を一瞬で消滅させたな。こんな恭順ができるのは奴らしかいないや。」

「しかし……あれは軍の公式記録から抹消されているし、第一、うわさ話の域を出でいないじゃないか。」

堅物なウイルソンの言葉にため息をついたマックスは父親ほどの年齢の友人に返した。

「お前さんが信じなければそれでも構わんさ。確實なことは今、人類は滅亡の危機を一時脱したということさ。おそらく、ほんの一時に過ぎないだろ。が……」

マックスは脅威の去つたモニターを焦点の定まらぬ目で見つめていた。ひとまずの危機は去つた。だが、本当の意味でまだ危機は去つていない。マックスは時間稼ぎしか出来なかつた自分をいくらか恥じてゐるようだった。

第15話 決着！光の果てに・・・

「ラグエル！――」

爆発の最中、ラギエルは相棒の、いや、自分の半身とも言える存在の名前を叫んだ。最早、返事が返ってくることがないと分かっていても。ラギエルはバリアーをはろうとせず、彼女の半身の最期の光を受けていた。

「ああ・・・ラグエル、ラグエル！――」

コクピットの中のラギエルは操縦桿すら握りしづともせず、うすくまつてラグエルの死を悼んでいた。

「おのれ・・・ラグエルを・・・ラグエルを！――！」

ラギエルは半身を死に追いやった白銀の戦艦をにらみつけると、全てのフェザーを出して突進した。

「遅かつたな・・・お前はもう詰んでいい。」

ラギエルの周囲で何かが煌めいた。きらめきは光の線を描き、光の点を結び始めた。

「これは・・・」

「グランドクルス点火。」

残弾154発全ての衝撃収束爆雷が一気に爆発した。通常4発でさ

え絶大な威力を発揮するグランドクルスが154発という規模で同時に炸裂した。その衝撃は想像を絶し、全ての圧力がラギエルに襲いかかつた。

コクピットのラギエルは悔しさに泣き叫んだ。天使ラギエルは重圧に耐えきれず、機体の各部が爆発を起こし始めた。

「ラギエル・・・君のもとへ・・・」

グラウンドクルスのまばゆい閃光の中、ラギエルはラグエルの幻を見た。ラグエルの幻はラギエルに手を伸ばすと、ラギエルを光の海に吸い込んでいった。天使ラギエルは光と重圧の中で爆発した。

「エネルギーを全てバリアーへ！－！」

天使のエネルギー炉の爆発は周囲の青空を真っ白に変えた。まほろばはバリアーを全開にすると爆発の熱と衝撃に耐えた。それでも爆発の間近にいた衝撃は凄まじく、まほろばの艦橋内部にもダメージを与えていた。

「うわー！」

まほろばの計器がスパークし、火花が散った。

「耐えるんだ！！」が正念場だ！！

昇は爆発の衝撃から来る激しい揺れに耐えながらクルーに言つた。
やがて、爆発が治まり、周囲に青空が戻つた。周りにはまほろば以外の何も存在しなかつた。

「勝つたな。俺たち・・・」

「世界を救つたんだ！」

天使を倒したクルーは口々に言った。昇自身も安堵したその時、天から光の槍が降つて来た。その狙いはまほろばからずれていたが、その威力はまほろばに大きなダメージを与えた。

「左舷半重力制御翼大破！！左舷側全火器、使用不能！！」

「第一主砲塔、大破！！」

「第十一装甲板まで融解！！」

被害状況が次々と報告され、まほろばの被害が極めて甚大である事実を昇は突きつけられた。

「くそお・・・天使め！！」

まほろばの前方に光の柱が現れ、その中に長大なライフルを携えた華奢な姿をした天使が舞い降りた。

「我らの計画を妨害するものよ・・・我が、光の槍でその魂が浄化されんことを・・・」

まほろばの前に東京を破壊した天使、ガブリエルが立ちはだかつた。

第16話 まほろば最後のとき

最悪な状況だった。一体の天使を倒したのもつかの間、東京を消滅させた天使、ガブリエルがまほろばの前に現れた。しかし、もはやまほろばには天使と戦う力は残されていなかつた。

「主砲選択。51cmレールガン。速射で片をつける。」

昇は現状唯一天使にダメージを与える兵器を選択した。唯一使用可能だつたブリッジに近い第一砲塔の砲身がすぐに変わつた。

「撃て……」

準備が整つと、昇はすぐに発射を命じた。発射弾数は毎秒10発。100発近い砲弾がガブリエルに向かつて放たれた。ガブリエルはまほろばの最後の攻撃にも慌てる様子はなく、緩やかに、それでいて、決して遅くはない動きでライフルを構えると、高出力ビームを発射した。

ビームは海を先、砲弾を蒸発させながらまほろばに向かつて行つた。

「回避い……！」

昇はすぐさままほろばを避けさせたが、左舷が言つことを聞かないまほろばの動きは遅く、紙一重で左に避けたに過ぎなかつた。それは単に直撃を避けたというだけであつて、まほろばはさらに甚大な被害を受けた。

「右舷反重力制御翼融解……！」

「右舷側全火器、使用不能！！」

「第一砲塔、大破！！」

左舷と右舷の全火器が使えず、主砲も沈黙。まほろばはこのとき、全ての戦闘機能を失つた。

「全乗員をコアアモジュールへ避難。急げ。」

重力制御を失つたまほろばはロケットの噴射により辛うじて浮いていられる状態だつた。

ガブリエルはまほろばに狙いを定めると、トリガーを引いた。

「せめて、汝らの魂が幸いならんことを・・・」

ガブリエルの祈りをこめた一撃が、まほろばを貫くかと思われたその瞬間、ガブリエルの高出力ビームは横から襲来したビームの一撃を受け、霧消した。

「あれは・・・」

「かぐづちー！」

「クピットの中のガブリエルと昇が同時に言った。まほろば級2番艦かぐづち。まほろばを凌ぐ戦闘力をもつ、現在地球で最強の艦だつた。

第17話 かぐづち対ガブリエル

「艦長ー！」無事ですか？」

まほろばの副長から、かぐづちの艦長に昇進した真田誠が昇に回線を開いた。

「手ひどくやられたが、なんとか大丈夫だ。」

昇は誠に無事を伝えるとまほろばを戦場から下がらせた。

「艦長。あとはかぐづちにお任せください。」

かぐづちは天使とまほろばの間に位置どると即座に攻撃態勢をとつた。

「櫻花。全艦砲雷撃戦用意。目標、前方の天使。」

モニターに桜花そっくりの十一単を着た少女が映し出された。かぐづちの管制コンピュータ櫻花である。まほろばと異なり、かぐづちは砲雷撃戦に特化した重武装艦である。そのため火器管制は非常にデリケートでM機関とは独立したコンピュータシステムが必要だった。それが櫻花である。

櫻花の導入により、かぐづちは驚くほどの省力化を成し遂げていた。火器制御、索敵のための人員を必要としなかつたことで、まほろばの3分の2までクルーの数を減らすことが出来た。

「了解。主砲51cm陽電子砲。放射性物質除去フィールド形成開

始。」

かぐづちの主砲が天使に向けられた。かぐづちの主砲もまたまほろば同様、三種類の選択が可能だったが、その砲力は段違いだった。主砲塔は6連装主砲塔が5基、30門。まほろばの三連装3基9門に対して、実に3倍以上の攻撃力を有していた。

また、その砲塔の異形さは見るものを圧倒した。三連装の主砲が入れ違いに上下重なつており、敵にその禍々しい牙を向けていた。

「撃てえ！！！」

誠の号令とともに凄まじいエネルギーの奔流が天使ガブリエルに向かつて放たれた。

ガブリエルはかわそうとせず、もう一度ライフルを発射した。

莫大なエネルギー同士がぶつかり合い、スパークした。両者の攻撃の威力はほぼ互角だった。天使ガブリエルは素早く身を翻すとかぐづちの真上に飛び出した。

「艦長！天使直上！！」

誠が上を見たとき、ガブリエルはすでに攻撃態勢に入っていた。

「対空レーザー照射！」

200を超える発射口から、レーザービームが照射された。まほろばのように緩やかな曲線を描きながら、レーザーはガブリエルに向かつていった。

「くつ……」

すでに発射態勢にあつたガブリエルは敵の思わぬ反撃に対応が一步遅れた。七大天使一の軽量を誇るガブリエルはスラスターの出力を全開にして回避することは成功したが、ライフルだけはレーザーに捕まり、破壊された。ガブリエルは右腰にマウントされたハンドガンを手に構えた。

「もはやそちらには攻撃オプションはない。降伏しろ。」

誠はガブリエルに呼びかけた。

「いいえ。私はあなたたちなどには屈しません。この世界の浄化を成し遂げるために。私達は決して屈服はいたしません。」

そう言つと、ガブリエルはハンドガンのトリガーを引いた。三連射のあと、周囲は煙に覆われた。

第18話 千尋の思い

「煙幕か！？ 橘花。索敵を。」

「だめです。煙幕の中に電波攪乱剤が入っているようです。ロストしました。」

「そうか・・・繰り返し天使の襲来があるかもしれない。警戒を続けてくれ。」

天使ガブリエルは音速を遥かに超えるスピードで上昇を続けていた。ガブリエルと同等のビーム兵器をもつていたとは・・・主に報告すべく、ガブリエルは真つすぐヴァルハラを目指していた。

あと少し、もう少しでヴァルハラにたどり着く。

太陽の光に反射して、ヴァルハラが一瞬きらめいた。そのときだつた。ガブリエルが高速で接近するエネルギー体の存在を確認したのは。

「え？」

これが、ガブリエルの最後の言葉だった。バリアーをはる間もなく、エネルギー体はガブリエルを貫き、爆発させた。

遙か成層圏で、ガブリエルはそのはない命をちらせたのである。

「天使、消滅しました。艦長。」

「ありがとうございました。桜花さん。」

爆発から遠く離れた空域に青く輝くまほろばとうりふたつの戦艦の姿があつた。

名をちはや。まほろば級3番艦である。外見、武装こそ、まほろばと同じだが、内部が全く異なつていた。

艦の全ての制御を統合コンピュータである桜花が行なうため、人員は艦長ただ一人という史上初の単座式万能戦艦であつた。

艦長席ではちはやの艦長になつた千尋が一枚の写真を眺めていた。

「仇をとりましたよ・・・先輩。」

東京消滅に巻き込まれた出版社時代の先輩と千尋が仲良く腕を組んでいる写真だつた。先輩が一度と千尋と腕を組むことも笑うこともない。

仇を取ることを先輩は望んでいなかつたかもしけないが、千尋はそれ以外出来なかつた。

「艦長・・・」

桜花は千尋に呼びかけた。

「大丈夫だよ。桜花さん。それに今まで通り千尋でいい。基地に帰投しよう。もう天使は襲つてこないだろうから。」

ちはやはエンジンを点火させると空に消えていった。

「ガブリエル・・・まさか・・・」

ヴァルハラの間近でオチか爆発にラファエルは動搖を隠しきれなかつた。

「そうか・・・ガブリエルも・・・」

ミカエルはガブリエル最後の光を見つめていた。

「七大天使も、僕たちだけになつてしまつたね。」

ミカエルはあまり氣にしていないような口ぶりでラファエルに言った。

「そろそろ、計画の最終段階に移るわ。ラファエル。」

ミカエルは座っていた椅子から立ち上がつた。最強の天使がついに愛機に向かつて歩き出した。世界の浄化の時は近い。ラファエルはそう感じていた。

第19話 その名はヴァルハラ

「敵の基地が分かつた！？」

特殊戦術研究旅団所属の最新鋭戦艦すさのおで司令官の山根は言った。

「はい。三体目の天使をRF-4EJが追尾した映像です。」

特殊戦術研究旅団戦略研究部の赤石三佐が報告した。映像にはかぐづちによってライフルを破壊され、上空に退避するガブリエルが映し出されていた。

「こ」の上昇角と映像を解析した結果、衛星軌道上に大きな建造物の存在が確認されました。」

RF-4EJのカメラ映像にはつすらとだがあまりに巨大な構造物の姿があった。

「だが、衛星軌道上にある物体だぞ。どうやって攻撃するかが問題だ。」

山根は頭を抱えた。攻撃のオプションがない。場所が分かつていても、攻撃は不可能に近かつた。

「・・・待てよ。たしか開発中の宇宙往還機があつたはずだ。小森博士に連絡を取つてくれ。」

山根は直ちに部下に連絡を取らせた。

「山根君。東京では大変だつたな。」

小森はテレビ電話で簡単な挨拶を交わすと、本題を切り出した。

「震電II。完成も初飛行も済んでいるが、たつた一機しかないぞ。今、映像を見たが、あの大きさの物体が無防備だとは思えない。2,000機の戦闘機が天使を前に全滅したのを知らない訳ではあるまい?」

「そうですね。」

大気圏内なら、まだ十分に戦力はある。いくらでも戦い様はある。だが、宇宙はそうはいかない。今、特殊戦術研究旅団にも、世界にも宇宙を往還出来る戦闘機は存在しない。作戦は暗礁に乗り上げた。

第20話 まほろば月へ

「天使の基地が分かつたつて？」

M機関基地にある作戦室で、昇は千尋に尋ねた。

「はい。ちはやで天使を倒す寸前、奴は明らかに上空を目指していました。そして、ちはやの光学センサーとコースを算出して得られたのがこの構造物です。」

千尋はモニターにヴァルハラの三次元映像を表示させた。桜花からの情報では、ヴァルハラは地球の衛星軌道上にあるどの物体よりも巨大だった。

「かぐづちでも破壊出来るかどうか・・・」

「それにまほろばはしばらく使えないよ。」

誠の後ろから、千早博士が作戦室に入つて來た。

「天使とのダメージがあまりに大きくてね。自力航行不可能、全兵装大破。撃沈寸前だつたよ。半年以上は修理にかかるね。」

「なんてこつた・・・」

昇は拳を叩いた。

「だが、天使の攻撃再開は今にも始まるかもしない。そうだろう？」

昇、誠、千尋。まほろば級三人の艦長は同時に頷いた。

「だから、すめらぎを使うのさ。」

千早博士は自信を持つて言った。

「まほろばのコアモジュールは生きているし、すめらぎならあの構造物を破壊することが可能だ。あまり時間がない。まほろばのクルーは月に飛んでくれないか？」

月までは片道3日はかかる。一刻の猶予もなかつた。

「艦体各部接続正常。戦闘ブロックページ準備。」

「準備完了。」

「ページ。」

まほろばの艦体からブリッジと動力部のみが切り離された。まほろばの心臓部のみ抽出されたその姿は、流麗な艦体とはまるで異なる異形の姿をしていた。

「よし、まほろば。これより月面基地に向けて発進する。」

まほろばの艦橋に降り立つた昇はただちに発進を命令した。海面を出たまほろばは遙か上空、月に向けて飛び立つていった。

「さて、時間だね。ミカエル・・・行くよ。」

「クピットの中のミカエルは静かに目を開いた。眼下にはある都市の光が弱々しく瞬いていた。

第21話 よみがえる友情

「――ユー・ヨークが消滅！？」

山根がオペレーターに問い合わせました。

「それだけではありません。ほぼ同時に、ボストン、フィラデルフィア、ボルチモア、ワシントン。他アメリカの主要都市が消滅しました。」

映像には燃えるものもなく、ただのクレーターと化した都市の名残があつた。

「司令、ロンドン、リバプール。イギリスの主要都市が消滅したとの情報が！」

「ヨーロッパの各都市も攻撃を受けています！」

山根は戦慄した。

天使の攻撃のペースが早すぎる。そして、世界には衛星軌道上にあるヴァルハラを攻撃出来る武器も攻撃を仕掛けるだけの兵力もない。何も出来ずに滅びの時を待つしかないのか。山根は歯ぎしりした。

「手はない訳じやないぞ。山根。」

整備班長の米沢から突如通信が入った。

「改造した8式自走砲だ。こいつなら衛星軌道上の敵にも届くはずだ。」

米沢の後ろには1年前に大破した8式自走砲の生まれ変わった姿があつた。

「司令官。敷島昇と名乗る者から通信が入っています。」

オペレーターが山根に報告した。山根は懐かしいその名前を聞き、すぐに回線を開いた。

「こちらはまほろば艦長、敷島昇です。白い戦艦と言えば、わかるでしょ。山根・・・久しぶりだな。」

山根は面食らつた。10年前に死んだはずの親友が元気に話している。幽霊でも見ているかのような感覚に襲われた。昇はそんな山根に構わずに話し続けた。

「山根。俺たちは秘密機関として戦ってきた。だが、天使の攻撃を前に俺たちだけでは戦えない。お前達、いや、世界の助けが必要なんだ。」

昇は話した。天使はあと2体。攻撃準備が整うまでも3日はかかる。それまで天使の攻撃を防がねばならないと。

「だがこちらには天使に攻撃を仕掛ける武器も、防ぐ武器もないんだ。」

山根は昇に言った。

「そこは俺たちがなんとかしよう。この座標に来てくれ。それから、お前に天使撃滅作戦の立案と指揮を頼みたい。世界中でお前以外に

この作戦を委ねられる者はいない。頼む。」

昇は防大以来の親友に頼んだ。

「受けてやれ。山根。俺も、お前以外はこの作戦の指揮が出来る奴はいないと思うぜ。」

米沢も昇に同意した。

「分かった。やらせてもらひ。」

山根は力強く頷いた。昇と米沢は微笑むと通信を切った。

第22話 戦いへの序曲

数時間後、山根はM機関のドッグ型潜水補給母艦、たらちねとの会合を果たしていた。

M機関からもたらされたのは超大型のバリアーシステムだった。まろばのバリアーを簡易化した超広範囲を覆うバリアーシステムその範囲はユーラシア大陸とオーストラリア大陸を覆うほどだった。山根は外交ルートでバリアーシステムの設置を了承せると、高度飛行が可能な輸送機、いざなみを全機離陸させ、成層圏でシステムを投下した。

高度2万メートル。等距離で浮遊する円柱同士を結ぶように光の膜が現れた。

その数分後、ヴァルハラから、光の槍がモスクワめがけて突き刺さった。しかし、光の槍はモスクワを破壊することなく光の膜の表面を拡散し、霧消した。

ヴァルハラの攻撃から世界の都市を守ることに成功した山根は、さらに世界中の軍に宇宙を攻撃出来る手段はないか尋ねた。それに応えたのはわずか2力国だけだった。

アメリカは100機あまりの宇宙往還戦闘機を完成させていた。その名をX-40、世界初の実用宇宙往還戦闘機だった。山根はアメリカに作戦内容を説明すると3日後の作戦開始まで天使の攻撃に耐えるように言つた。

もう一国はスウェーデンだった。スウェーデンはまろばに次ぐ飛

行戦艦を完成させていた。名をドラケン。高出力硬X線レーザー砲で武装し、宇宙航行も可能な巨大戦艦だった。

まほろば級に劣らぬ強力な戦力を得た山根達は3日後の戦いの準備をはじめていった。

第23話 戦闘開始！

3日後、まほろばのコアモジュールは月の裏側にいた。地球から常に見えることのない月の陰でM機関は最大最強の奥の手を完成させていた。名をすめらぎ。まほろば級を遙かに超える超巨大宇宙戦艦だつた。平面から見ると剣のよつたシルエットを持つ艦の中心にまほろばはたどりついた。すめらぎの中心がまほろばを受け入れるようを開くと、まほろばはゆっくりとすめらぎの本体にドッキングした。

「コアモジュール、ドッキング完了。各部接続開始。」

「主機球形直列S機関との同調接続に入ります。」

「火器管制システム接続開始。」

オペレーターが次々とすめらぎとのドッキング作業を開始した。めまぐるしく変わるモニターの隙間から見える地球を見て、昇は山根達を案じた。すめらぎが攻撃可能になるまで2時間、まほろば級2隻をもつてしても、天使達を相手に苦戦は免れない。昇は今は仲間を信じるしかなかつた。

地球衛星軌道上、人類は持てる戦力のすべてを投入していた。M機関はまほろば級万能戦艦2隻、零式桜花II型宇宙戦闘機仕様「雷閃」100機、アメリカ側はX-40宇宙往還戦闘機100機、スウェーデンからは万能飛行戦艦ドラケン。そつそつたる戦力だつた。

山根はまほろば級2番艦かぐづちに座乗すると陣頭で指揮をとつた。

捕捉不可能だつたヴァルハラに初めて人間が攻勢をかけて来たのである。ラファエルは驚いた。

「馬鹿な・・・奴ら、どうして・・・」

「ガブリエルの動きをトレースしたんだね。ふふ。大した奴らだ。」

その答えをミカエルは知っていた。ミカエルは何事もなかつたような口ぶりで言った。

「私が出ます。ミカエル様は攻撃を続行なさ・・・」

「差し出がましいぞ。ラファエル。君は僕に命令するのかい？」

ラファエルが主を慮つて言つたことが逆に主を怒らせる結果になつた。ラファエルはミカエルに非礼を謝つた。

「いいさ。考えていたことは同じだからね。目の前にいる邪魔者を排除して来ておくれ。」

ミカエルはラファエルに出撃を命じた。

数分後、ヴァルハラから姿を現した天使を見た山根は攻撃開始を宣言した。

「まほろば級とドラケンで天使の相手をする。宇宙戦闘機隊は敵性構造物を破壊せよ。」

人類と天使の最後の戦いが始まった。

第24話 ラファエル対まほろば艦隊

天使ラファエルは七大天使の中で接近戦を主眼において設計された機体だつた。ラファエルはかぐづちとちはや、ドラケンの主砲をぎりぎりでかわすと、かぐづちの真正面に立つた。

「これが旗艦だな！？沈め！！！」

かぐづちのブリッジめがけ、ラファエルは二丁のハンドガンを構えた。

「今だ！！！」

「撃て！！」

山根の指示に従つて千尋はちはやの主砲を発射した。山根は攻撃をかわされるのを承知でかぐづちを囮にしたのである。ちはやの51cm高出力レーザー砲の一撃がラファエルに命中した。ラファエルは絶妙のタイミングで『えられた一撃を回避することが出来ず、レーザー砲の直撃を受けた。

「ちつ！」

ラファエルは舌打ちした。敵にダメージを与えないまま、攻撃を受けてしまつたのである。バリアーを張る暇もないまま受けた傷はラファエルの想像以上に深刻だつた。片腕が吹き飛ばされたのである。ハンドガンやナイフなど、近接格闘用の武器を扱う天使であるラファエルにとって、片腕をもぎ取られたことは戦闘力の半減を意味していた。

もつとも、まほろば級の主砲の一撃を受けたのである。その程度の損害はむしろ軽微だと言えた。

すかさず、山根は重力偏向式レーザーを使った。数百本を超えるレーザービームがラファエルに来襲した。

「こしゃくなーーー！」

ラファエルはバリヤーを貼りながら再びかぐづちに接近した。主砲に比べ、レーザーは弾数が多いが、威力は格段に低い。攻撃のことごとくがバリヤーにはじかれた。

だが、ラファエルがかぐづちに届くことはなかつた。7枚のフィン状の物体がラファエルの動きを止めたのである。

「なんだ!? これは! ?」

「クピットの中のラファエルは操縦桿を動かしたが、びくともしなかつた。

ドラケンが持つ独自のシステム。ワルキューレシステムだった。

ドラケンは艦体後部に大型のフィンスタビライザーがマウントされている。それを自在に脱着し、独立機動する兵器として活用する。これがワルキューレシステムだった。巨大な物理攻撃であるが故にバリヤーを突破でき、ラファエルの動きを止めることが出来た。

ラファエルが力の限り抵抗できたのはわずか30秒ほどにも満たない時間だった。

まほろば級2隻から艦首砲の集中攻撃を受けたのである。

「バリアー出力全開・・・くそ、くそおーー!! カエル様あーー」

ラファエルの必死の防御も空しく、機体は一瞬のうちに爆散した。

第25話 難攻不落！ヴァルハラの脅威！

「強すぎる・・・！」

おそらく、まほろば一隻では苦戦していだらう強大な天使を何の損害もなく倒してしまった。山根の指揮もさることながら、艦隊を組むということがこれほどまでに効果をもたらすものなのか・・・誠はあまりの戦果に驚きを隠せなかつた。

本来ならば勝利の凱歌をあげただらうが、山根はそれを許さなかつた。雷閃やX-40ら宇宙戦闘機隊が苦戦を強いられていたからである。

敵の本拠地だけあつて、ヴァルハラの守りは堅く、対空砲火は濃密を極めた。戦闘機隊はそれでも攻撃をかわし、レーザー砲による攻撃を加えたが、ヴァルハラはびくともしなかつた。

「化け物め・・・」

X-40隊長のアルフレッド・マクシミリアン中佐が言つた。彼らも宇宙戦闘機ならではの高速と機動で幾度となく攻撃を加えていたが、表面の軽微な損害にどどまり、大きなダメージを『えられずにいた。

「戦闘機隊、全機下がれ！！主砲、および艦首砲斉射！！」

山根は戦闘機隊を全機下がらせると、艦隊による砲撃を『えた。しかし天使を倒した一撃も天使の基地には通用しなかつた。主砲の一撃も、艦首砲の超高出力レーザーも巨大なヴァルハラの前では何の

意味も持たなかつたのである。

「あははは・・・ラファエルを倒したことは讃めてあげるよ。けれど、このヴァルハラはその程度の攻撃何か効かないよ。」

ヴァルハラの制御機を兼ねた天使ミカエルの「クピット」でミカエルは冷然と笑つた。

「さて、攻撃を受けてばかりというのも興がないね。そろそろ攻撃をせてもうりつよ。」

対空防御にのみ徹していたヴァルハラが全ての砲門を開いた。

「全機、回避！！！」

山根が言つが早いか、ヴァルハラから数千本のエネルギー・ビームが放出された。それは攻撃部隊だけでなく、地上にも容赦なく降り注いだ。エネルギー・ビームとは言え、一発一発が都市を壊滅させるほどの威力である。地上に向かつたビームの大半はバリアー・システムによって受け止められたが、バリアー・システムもその負荷に耐えきれず、ことごとく爆発、四散した。

「まずい！大陸が無防備に！！」

バリアーを失つた地球上の各都市はヴァルハラの攻撃に対し無防備になつてしまつた。

第26話 来たれ！運命の時！

「あはははは！地上よー！ヴァルハラの業火で焼かれるがいいーー！」

「迎撃だ！できるだけ、敵の攻撃を拡散させるんだー！」

ヴァルハラは地上に向けて百を超えるビームを放つた。かぐづち、ちはや、ドラケンはヴァルハラのビームを主砲の攻撃で相殺しようとしたが、数が多く、半数以上が地表の都市に降り注いで都市を壊滅させた。

「まだか！？」

千尋は時計を見た。あと5分。あと5分ですめらぎが攻撃可能になる。だが、ヴァルハラが本格的に攻撃を開始した今、その5分が永遠に思われた。

「あと5分。あと5分だけ、ヴァルハラの攻撃を止めるんだー！皆ー！最後の勝負だぞーー！」

山根は全員に檄を飛ばした。地球の衛星軌道上で無数の光芒が瞬いていた。

「すめらぎ。全回路接続完了。」

「まほろばとの主機同調確認。」

「エネルギー順調に充填中。」

「目標を視認。」

オペレーターが攻撃準備が整いつつあるのを昇に告げた。

「よし、皆。もう少しだ。頑張ってくれ。」

山根達の激しい戦闘は地上からでもはっきりと見て取れた。

8式自走砲改を準備した米沢はその激しい光を見つめていた。8式自走砲改は特殊戦術研究旅団技術開発部長長沼博士のもと改造された、地上唯一の磁力加速自走砲台だった。8式自走砲の砲身長を1.8倍に延長し、磁力加速路に改造されていた。今回はさらに延長砲心を装備し、さらに加速をかけ、衛星軌道上の物体でも迎撃を可能にさせていた。

「山根よお。あと少しだ。死ぬんじゃねえぞ・・・」

「おやつさん！8式自走砲改、発射準備完了です。いつでも撃てます！」

「あと2分待て！・・・いよいよこれからだぞ。」

部下に言われ、米沢は8式自走砲改の制御室に入つていった。長大な砲身が、天を向いてそびえ立つていた。

「あと10秒、9、8・・・」

ヴァルハラの激しい攻撃をかわしながら、千尋は桜花が表示した力ウントダウンを見つめていた。

「5、4、3・・・」

誠もバリアーでヴァルハラの攻撃に耐えながら数え続けていた。

「2、1・・・」

山根もカウントを続け、そして運命の時は来た。

第27話 陥落！ヴァルハラ！！

「撃てえ！！！！！」

地上と月軌道上から二方向の砲撃がヴァルハラに襲いかかった。

「何！？」

ミカエルは目を見開いた。ミカエルの想像をはるかに上回るエネルギー量だった。

バリアーのないヴァルハラでは大ダメージは免れない。かといって回避も出来ない。ミカエルは歯ぎしりした。

ミカエルがすめらぎのエネルギー・ビームに気を取られている間に、チタニウム合金超徹甲弾がヴァルハラを貫いた。砲弾はヴァルハラを貫通せず、ヴァルハラの中心部で停止した。徹甲弾の内部に仕掛けられた発信器が現在位置を山根と米沢に伝えた。

「やつた！」

「よつしゃーー！」

山根と米沢は同時に叫んだ。続いて、すめらぎのエネルギー・ビームがヴァルハラを襲つた。

「うああああ・・・・！」

ミカエルは自分の機体にバリアーをはり、攻撃に耐えた。しかし、ヴァルハラはそうはいかなかつた。各部で爆発が起き、直撃を受け

た上部構造物は消滅した。ヴァルハラはその攻撃力を根こそぎとられたのである。

「どうめだーー！」

山根は手に持ったスイッチを押した。すると、ミカエルの真下、ヴァルハラ中心部で大爆発を起きた。

この攻撃こそが山根の本命だつた。外側からダメージを与えては完全破壊にはいたらない。破壊するには内部からの破壊しかない。山根はそう考えていた。

「くそ・・・くそあーーー！」

ヴァルハラは各部で爆発と崩壊が起きていた。もはや形を保てなくなつたヴァルハラは次々と大気圏に向かつて落下していった。

第28話 ミカエルの光

「総仕上げだ！全員で破片を粉々にしろ！！」

山根は残った戦力のすべてを破片の破壊を投入した。かぐづちもちはやもミサイル以外のすべての兵器を解放して、破片を粉々にしていった。

崩壊するヴァルハラの中でミカエルは疾走した。完全な計画だった。あと少しで人類は絶滅する。絶滅するはずだった。なのに今、ヴァルハラは崩壊し、その破片は粉々に砕かれている。計画が完全に潰えたことをミカエルは知った。

崩壊するヴァルハラから脱出したミカエルは月を見た。計画をつぶした元凶、許されざる存在がそこにはあった。ミカエルは生まれて初めてかもしぬない憎悪のまなざしを月に向けた。だが、天使ミカエルの力をもつてしても、月の敵は倒せない。

ミカエルは眼下の敵達を見た。破片を碎くのに夢中で、自分のことは気づいていない。奴らさえ倒せば、人類滅亡は容易い。ミカエルは残忍な笑みを浮かべた。

ミカエルはかぐづちに狙いを定めると機体を翻し、高速で突進した。

ミカエルは七大天使のなかでも最強の機体。ガブリエルを倒した敵とはいえ、たやすく倒せる。しかもまだ自分にはきづいていない。いや対応出来ないのだ。どんどん近づいているのに破片の破壊に集中だ。だが、待てよ。近づいているのに、なぜ、破片の攻撃を続けている？まるで、ミカエルがいないかのように・・・ミカエルは数

秒で思考を巡らせると一つの結論に達した。

「罠か！？」「

気づいたときには遅かった。七本のワルキューレがミカエルの五体を貫き、その自由を奪つたのである。

「くそ！」

ワルキューレはミカエルをどちらかと、パワーを全開にして地球の重力圏を離れていった。

「放せ！放せえ！－！」

ミカエルの視線の先には、ヴァルハラを破壊した巨大戦艦の姿があった。ミカエルは自分の運命を悟つた。

「くそ！・・・くそおおおお！－！」

すめらぎが一瞬煌めいた。すめらぎのヒネルギービームはミカエルを飲み込み、原子の塵に還していった。宇宙の片隅で人類の勝利を告げる光が瞬いた。

最終話 母なる地球

「やつたあ！」

地上で、宇宙で、月で勝利の凱歌が上がった。地球は今、滅亡から救われたのだった。

「まだだ！！」

山根は叫んだ。

「まだ、一番厄介なものが残っている・・・」

ブリッジの全員は息を飲んだ。ヴァルハラの中で最大の破片が大気圏に突入しようとしているのだ。

「艦首陽電子砲最大出力！！艦のエネルギー全てを使っても構わん！！！」

誠は命令を下した。

「桜花さん。艦首砲を最大出力で発射だ！かぐづちとタイミングを合わせるんだ。」

「はい。」

千尋は桜花に命令をだした。

スーパー・コンピュータの桜花はたちまちのうちに座標を算出していく。

「撃て！」

二人は同時に叫んだ。2隻のまほろば級戦艦から放たれた最強の一撃がヴァルハラ最大の破片で交差し、炸裂した。破片は四散し、大気圏に突入すると燃え尽きていった。

「やつた・・・」

山根は小さく言った。

「人類の勝利だ・・・」

昇は地球で瞬いた最後の光を見た。

人類は滅亡から救われた。だが、その犠牲は大きかった。天使による攻撃で、数億の人間の命が失われただろう。今まで敵と戦うためにその力を使ってきた。しかし、これからは戦うためなく、人類の復興のために、すめらぎとM機関の力を使わなければならない。思いを胸に、昇はクルーに言った。

「さあ、皆。地球に帰ろう・・・仲間達が待つてる。」

すめらぎのエンジンが低いうなりを上げた。すめらぎはゆっくりと月の軌道を離れると、地球に向けて、進路を向いた。母なる地球へと・・・

最終話　母なる地球（後書き）

最終話ですー。JR愛読、ありがとうございました。龍の旗の下にまよひじへお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7084f/>

まほろば 第二部

2011年8月15日06時29分発行